

# 天性の魔術師と王女

バロン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前世で最強を誇った殺し屋、組織の陰謀により死亡した後たどり着いたのはONE PIECEの世界！

この世界で暴れる台風の目はルフィではない、このゼロだ！

……俺はあなたを王にする。

# 目次

プロローグ	1
遭遇	13
虎王と美女	26
決闘と逮捕	40
虎王族へ	53
種族問題	70
船出と花見酒	89
料理屋の変	99
麦わらの一味	118
建国と画策	137
瞬殺	151
決着	164

交渉と分かれ目	176
帰国	188
交渉その2	205



## プロローグ

「クソ…床が近いな、こんな感覚は久しぶりだ」

俺、黒木 雷 は床に伏していた

周りは俺が流した血で染まり俺を中心に大きな血溜まりを作っている

しかし分かる事が一つある…俺は死ぬ

「ハアハアハア…やつと黙りやがった、おい！何人殺られた」

血で濡れたナイフを手にながら数人の仲間に叫ぶ大男

こいつが俺を刺した犯人だ、いや傷は山ほどつけられた、正確には致命傷も何カ所か

…たまたまこいつから切れた時に限界が来た、それだけだ

「知らねえよ！三百人いた仲間も残りはこれだけだ！」

今度は小柄な男が両手を広げ辺りを指す周りは俺以外にも多くの死体のが山のように積み上げられて生きているのはここにいる3人のみだった

「クソが…こんなの割には合わないぜ！何が伝説の殺し屋《雷鬼》を殺せば十億やるだ  
！」

今倒れている身長180センチ70歳ほど髪は全て白髪で口元にうっすら髭を生や

している、こいつは殺し屋の世界では結構有名な男だ。

殺し屋専門の殺し屋《雷鬼》その名の通り雷のような速度で依頼をこなし今までに殺した殺し屋の数は千人を越える冷酷無比・世界最強の殺し屋、今回は依頼と言うか形で誘き出すことには成功したが用意した何れも一騎当千の殺し屋三百人が残りは俺を合わせて三人、割に合わなすぎる

「ああー！ん？まだ生きてたのかクソ！」

血の海に寝転がる俺に血に濡れたナイフが降り下ろされ俺のクソみたいな人生は終わった…これで彼女に

「ん？まだ生きているのか？」

俺が目を開けると先程とは少し違う光景が広がる

「誰だあんた？」

目の前にいるのは全身白いローブを身に纏った15歳程の少女、そしてその少女は満面の笑みでこう言った

「おめでとうございませす、あなたは異世界への転生権を獲得しました！」

「……はっ？」

「いや、だからあなたは異世界への転生権を獲得したんです、まあ審査の基準としては……。」

それから俺は少女から色々なことを聞いた

少女の名前はカルム、この世界の神で全知全能の存在、どうやら数人の居る神の中で頂点に立つ者とのこと。

その事に触れたら「どうですか私スゴいんです！」とどや顔をかまされた、腹が立つ転生の条件は何点かあるらしい

・前世で十人以上の人を殺めた事の贖罪として人成らざる者に転生

・魂の強さが三人分以上の者

・死の予定より早く死を迎えてしまった者

以上のいずれかを満たしていれば転生となる

その内俺は前世で腐っても伝説の殺し屋《雷鬼》殺した人の数は裕に千人を越える。

そして俺の魂の強さ、測って貰った所何と十七人分も有ったどうやら生きていく上で自ずと上がって行ったらしい

更に何と俺はあの時死ぬ運命では無かったらしい、本当はあの時生き残った三人が仲間割れを始めて全員死亡、俺だけあの後来た仲間の救出班に助けられる筈だった。

こうして俺は転生権を満点で通過したのだ

《こんなにヤバイ転生者は私が全能神に成って二千年間始めてですよ》

全能神からお墨付きを貰ってしまった

さてどうやら俺はこれから異世界への転生を行われるようだ。

転生に当たってやはりスキルと言うものを貰えるらしい、通常《一つの転生権に一つのスキル》

と言う事なので俺は何と三つのスキルを貰える、大きな文字でスキルブックと書かれた本がカラムの手元に現れた、この中から三つ選べとの事だった

「ほお、結構あるんだな」

ざっと見て約5千以上ある項目から俺は三つ選んだ

「じゃあ経験値5倍・属性無効化・空間魔力吸収の三つで頼む」

俺が選んだのは

経験値5倍

(敵を無力化又は撃破に伴い貰える経験値を5倍にする)

属性無効化

(様々な属性攻撃を無効化する、レベルが上がるに連れ無効化も上昇する)

空間魔力吸収



(大氣中に存在する魔力を吸収するレベルが上がるにつれて吸収スピードと吸収量が増加)

の三個だ先ず異世界へ行くと為れば経験値を沢山とつて効率よくレベルを上げたい。そしてこれから行くところは様々な属性の攻撃をしてくる特殊な人もいるらしいので戦うことになれば必要不可欠だろう。

そして最後にやはり異世界へ行くなら魔法を使いたい、早々に魔力切れを起こしてしまつては元も子もないこうして俺は三つのスキルを早速付与して貰う事にした

「んじゃ、さっさとやるよー」

カルムはローブのフードを外した、そこには銀色の腰まで伸びた艶やかな髪、そしてその二つの瞳からは全てを見通すかの如く美しい蒼い瞳が覗いた

そしてカルムの白く透き通るような手の平がうつつすら光ったかと思うと俺の胸に手を当てた、少し暖かい感覚がする

「はい、これで終わりだよー」

カルムが胸から手を離すと体に何かが入ってくる感覚がする、恐らく空間魔力吸収の影響だろう

「あ、あと固有スキルも付与したから確認しといてねー」

何か今爆弾を落としていった気がする、固有スキル？

「あれ？言っただけじゃなかったっけ？固有スキルって言うのはあなたが前世で培った技術を今から行く世界の理に変換して使える様にするあなただけのスキルの事だよ、何のスキルが手に入ったかは私も知らない、まあ知ろうと思えば分かるんだけどね？」

頭の中でスキルと考えれば自分のスキルが目の前に表示された

ゼロ 十歳 鬼人族 魔術師

レベル 1

HP 500 / 500

MP 50 / 50 (+1000)

筋力 400

耐久 300

俊敏 20

魔力 50

スキル

・経験値 5倍

(敵を無力化又は撃破に伴い貰える経験値を5倍にする)

・空間魔力吸収

(大気中に存在する魔力を吸収するレベルが上がるにつれて吸収スピードと吸収量が増

加)

- ・属性無効化

(様々な属性攻撃を無効化する、レベルが上がるに連れ無効化も上昇する)

- 固有スキル

- ・言語理解

(転生者に授ける固有スキル言語を理解する)

- ・アイテムボックス

(転生者に授ける固有スキル自分のレベル×100個のアイテムを収納可能)

- ・サイレント

(自分の存在を相手に悟らせない、レベルが上がるにつれてより強い敵にも発見されにくくなる)

- ・鑑定眼

(目に移る物を何でも鑑定出来る)

- ・伝承

(倒した敵のスキルを一つだけ受け継ぐ事が出来る、仲間に受け継がせる事も可能)

- ・魔術の基本

(基本的な魔術を使える様になる、レベルが上がるにつれ使える魔術も高位に替わる)

称号

・転生者

・全能神の加護

(全てのスキルが少し上昇)

名前は俺が思った通りの名前で設定してくれたい、そして人を殺めた為人への転生は許されず鬼人族へと変わったただなぞ十歳？

「ああ、あなたのスキルがだいぶチート級なのでちよつとアドバンテージ付けさせて貰ったわ、あと固有スキルは剣術と魔術が有ったんだけどあなたが魔術ばかり言うてるから魔術に設定しといたよ」

うーん、剣術も捨てがたいがぶつちやけ前世で死ぬほどやって来たから良いか！

「じゃあそのガラクタ箱から二つ装備を選んで」

カルムが指を鳴らすと俺とカルムの立っている場所の直ぐ側に絢爛豪華な宝箱が現れた

「(…このどこがガラクタ?)」

「いやあ、一時期武具作成に凝った時期があつてねその時の余り物や、怪物の体から出てきた魔剣とかいれてたら増えて困つてたんだよねえ」

俺は苦笑いしながら宝箱に近づいた

そこには様々な装飾品が飾られた豪華な剣や一見折れただけの剣のような物も有った、前世での目利きには多少自信があつたがここはあの世、前世の目利きが正しいとは言えない。

そこで早速一つのスキルを試す事にした

《鑑定》

頭の中で唱えると剣の前にスキルが表示された

・全能神の直剣

《身体強化》

《攻撃増加》

《破壊不能》

《付与属性・氷》

・全能神の曲剣

《身体強化》

《出血増加》

《破壊不能》

《付与属性・炎》

・悪鬼王の小太刀

《完全切断》

《破壊不能》

《魔術強化》

《劍術強化》

《付与属性・時空》

・全能神のフルプレート

《物理攻撃50%カット》

《身体強化》

《破壊不能》

・全能神のマント

《魔術効率増加》

《身体強化》

《破壊不能》

・悪鬼王のローブ

《魔力回復・大》

《魔術攻撃強化》

《破壊不能》

《魔力攻撃70%カット》

《物理攻撃20%カット》

うん、決まったわ

俺は悪鬼王シリーズを迷わず選択した、てかこんな装備をガラクタ箱に入れるって…

ちよつとした出来心でカルムを鑑定した

カルム 三千歳 神族 《全能神》

レベル？

HP？

MP？

筋力？

耐久？

俊敏？

魔力？

スキル

・全知全能

《全てのスキルを使用可能》

固有スキル

・この世の理

《世界で行えない事はない、干渉不能スキル》

すいませんでした！

俺はニヤニヤしながらこつちを見ているカルムに土下座をした、完璧にばれてる

こうして俺は晴れてスキル・装備を貰い異世界への転生を始めた

「じゃあそこから動かないでね」

カルムが指を鳴らすとまるで床が抜けたかのような浮遊感と共に俺の意識は闇に落ちた



## 遭遇

目に映ったのは澄み渡る様な美しい青空、体を起こして辺りを見回すと青々とした木々が太陽の光を浴びて光輝いている。

「…頭が痛い」

俺は転生の影響なのか頭を抱えながら立ち上がる、すぐ近くに川でもあるのか水の流れる音がする。

そちらの方へ歩くと直ぐに小さな川を見つけた、俺はそこで初めて自分の顔を見た、顔は黒い髪に赤い角が二本額から生えていた。

瞳は血のように深紅に染まっているどちらかと言うと女顔なのかもしれない。

まあ、この世界の基準が分からないが悪い顔立ちでは無いだろう

腰には漆黒の小太刀が差してある、服装は黒と赤のローブを頭まで羽織っているが中は何か和服である

「さて、先ずは拠点を作るか」

俺はスキルを開く

ゼロ

10歳

鬼人族

魔術師

レベル 1

HP 500 / 500

MP 50 / 50 (+1000)

筋力 400

耐久 300

俊敏 20

魔力 50

スキル

・ 経験値 5倍

(敵を無力化又は撃破に伴い貰える経験値を5倍にする)

・ 空間魔力吸収 レベル D

(大気中に存在する魔力を吸収するレベルが上がるにつれて吸収スピードと吸収量が増加)

・ 属性無効化 レベル D

(様々な属性攻撃を無効化する、レベルが上がるに連れ無効化も上昇する)

固有スキル

・ 言語理解

(転生者に授ける固有スキル言語を理解する)

・アイテムボックス レベル D

(転生者に授ける固有スキル自分のレベル×100個のアイテムを収納可能)

・サイレント レベル A

(自分の存在を相手に悟らせない、レベルが上がるにつれてより強い魔物にも発見されにくくなる)

・鑑定眼 レベル S

(目に移る物を何でも鑑定出来る)

・伝承 レベル D

(倒した敵のスキルを一つだけ受け継ぐ事が出来る、レベルが上がるに連れ引き継ぎ出来るスキル増加、仲間に受け継がせる事も可能)

・魔術の基本 レベル D

(基本的な魔術を使える様になる、レベルが上がるにつれ使える魔術も高位に替わる)

称号

・転生者

・全能神の加護

(全てのスキルが少し上昇)

間違いなくスキルは貰ったようだ、レベルの後ろにあるのはスキルのランクのようだ  
最低ランクからD↓C↓B↓A↓SとなりSが最高ランクになる。

俺は森の中を散策しながら使えそうな木をアイテムボックスに入れて歩く事にした。  
もしかしたら町に出るかも知れないし

暫く川沿いに歩き続けると街道のような所にてた

「街道があるって事は…町があるのか？」

俺は異世界初めての人間との対面に心を踊らせながら街道を歩いた

街道を歩き続けると馬車に乗る行商人のような者たちが前からゆつくりとこちらに  
向かってきた

「こんにちはー！」

俺が挨拶すると男は笑顔で挨拶を返してくれた

「ああこんにちは、君一人かい？こんな森の中でどうした？」

見た感じは50代後半程だろうか、そりや森の中に十歳の子供が一人うろついていた  
ら驚くだろう

「いや、ちよつと道に迷ってしまつて…」

「あー、道に迷つて…てここ町から馬車でも三日はかかるぞ？」

俺は町から先にある王都に手紙を届ける途中、川で水を汲んでいたら乗っていた馬と

手紙が消えていた……何て作り話をした。

流石にバレたかと思つたが、男は胸を叩いて

「若いのに大変だな……よし！俺も王都に荷物を届けに行くんだついでに連れてつてやる、乗りな！」

こうして俺は男の馬車にお邪魔した、そして俺はこの男《ドルド》からこの土地の事を聞いた

「お前、自分の住んでる土地の名前も知らねえのか！」

「あはは……父と母が死んでから近所の人の畑等を手伝つてばかりだったもので」

「しようがねえなあ、この島の名前はロゼーノ、ロゼーノ王国が統治しているグランドラインにある島だ

ただ今ちよつと厄介な連中に狙われているけどな……」

目に見えてドルドの顔が曇る

「この国は別名《花の王国》と言われる程様々な種類の花が咲き乱れる、中には他所の国には咲かない希少な薬になる花もある。

最近、海賊と山賊がこの近くの土地を荒らし回つてるって話だ、その海賊共にこの島の事がバレたら……」

俺はこつそりドルドを鑑定した

ドルド 53歳 人間族 行商人&騎士

レベル 24

HP 1350 / 1350

MP 0 / 0

筋力 1000

耐久 600

俊敏 400

魔力 0

スキル

交渉術 レベル B

(人との商談や相談を上手く進められるレベルが上がるに連れより確率が上がる)

剣術 レベル B

(剣を扱い戦えるようになる、レベルが上がるに連れより上手く扱える)

馬術 レベル C

(馬や馬車等の操作が出来るようになる、レベルが上がるに連れ更に早く目的地に着けるようになる)

称号

・王宮付の商人

(王宮に入れるようになる)

・騎士道

(自分の信じた信念、主をけして裏切らない)

ドルドは俺が何をしているのか分からず首を傾げていた、てかこいつならそこの山賊や海賊には負けないんじゃないか？

それとも山賊や海賊は俺の予想よりも強いのか？

「所でドルドさん、山賊とか海賊ってどれくらい強いんですか？」

「そうだな、まあ十人位なら俺一人で十分だが…全員を相手にして更に飛び道具何か使われたら俺でも殺られるだろうな」

「じゃあ一對一なら負けないですね」

「まあここらの海賊ならな、だがな良いかゼロこの海には決して戦っては行けない海賊が四人いる。」

そいつらは四皇と呼ばれていてこのグランドラインの後半新世界で争い続けてるんだ、まあお前にはそんなに関係ない事だが覚えておけ」

そんなたわいもない会話をしながら二人を乗せた馬車は進んだ、夜に成り街道の端に馬車を止めて馬を木に繋ぐ

「んじゃゼロ、飯でも取りに行くか」

どうやらドルドは森の中に晩飯を狩りに行くようだ、馬車にのせていた剣を手にして俺を手招きしている

「はー」

俺はこの世界で初めての狩りになる、前世で様々な国に行くことがあったからよくご飯として獣を狩って食べた、ああライオン美味しかったな

「所でお前時まで頭のローブ取るんだ？会ったときからずつと被ってただろ」

そう、俺はドルドに会ったときからローブを深く被ったままだった

この世界で角が生えている人間何て居るのだろうか？

「いや、ローブはちよつと」

「俺とお前の仲だろ、別に減るもんじゃない」

ドルドはどうしても言って譲らない

「…分かりました、でも驚かないで下さい」

俺はゆっくりとローブに手を回しフードを外した、そこから月夜に照らし出された深紅の双角、血のような紅に染まった瞳がドルドの前に晒された

「ゼロ…お前、その姿」

明らかにドルドが動揺し始めた



「あの…ドルドさん？」

「お前…呪われ人か！」

呪われ人、この名前とドルドの反応から決して良いことでは無いだろう

「ドルドさん、呪われ人って？」

「…お前の様な異形の者の事だ、獣人とも怪物とも違う何か別の生き物」

「…俺をどうするんですか」

俺はドルドに容易に想像できる質問を投げ掛けた

「呪われ人が生まれたら…殺す事になっている」

ドルドはゆつくりと腰に差した剣に手を添えた、それに伴い俺も悪鬼王の小太刀に手を添える

暫くの沈黙、それを破ったのはドルドだった

ドルドは剣を抜きゼロの脳天目掛けて振り落とす、ゼロはそれを左に避ける事でギリギリ回避した

「何でですか！」

俺の呼び掛けにドルドは答えない、振り落とした剣を今度は俺の腹目掛けて横に風ぎ払う

俺は悪鬼王の小太刀でその剣を受け止めた、一瞬凄まじい火花が散ったと思いきや次

の瞬間ドルドの剣は真ん中から切れていた

「くそっ！」

剣が切られた事に驚いたのか俺から距離を取る

「おいおいゼロ、何だその黒剣は！これでも国王様から頂いたこの国でも上位の剣だったんだぞ！」

ドルドは俺が持つ刀を見ながら苦笑いした、そして短くなった刀を右手に懐から出した小さな曲剣を左手に持ちまた襲いかかる

右手を俺の左肩から右足の方向へ、曲剣を右肩から左足の方向へ切り抜く

「オオオオオオ！騎士花《セイバー フラワー》」

高速で放たれた二つの軌跡は間違いなくゼロの両肩を捉えた

刹那ゼロは考えた

このスピードの斬撃を避けられるか？否、今のスピードでは避けられたとしても深傷を負うだろう

迎え撃つか？否、剣の腕は相手の方が上一撃凌いでも次で殺られる

俺の考え出した答え……魔術

俺は頭の中でスキル《魔術の基本》と唱えた、すると頭の中に声が響き渡る

《魔術の基本を行使します、YES/NO並びにYESの場合一度体の再構築を行い

ます》

俺は迷わずYESを選択した

その瞬間俺の体をドルドの剣が通過した

「何だと!!」

俺の体から発せられた目映い光に辺りが照らされる、ドルドも思わず目を手で隠した光が収まりその中心に立っていたのは…、何も変わっていないゼロだった

「な、何だビビらせやがって!」

ドルドが再び剣を握り直し俺に向かって疾走する

しかし俺には先程までの緊張は無かった。

先程の光が発していた瞬間、俺のなかに様々な知識が頭の中に雪崩れ込んで来た、俺は手をドルドに向けると

「ファイアウォール」

その瞬間俺とドルドの間だの地面から炎が吹き出した

今度はドルドの両脇そして後ろに、一辺10メートル程の炎の檻が完成しドルドを閉じ込める

俺はゆっくりと炎の壁に向かって歩き始める、俺が炎に当たる瞬間、その部分のみ横に裂けた

「…ドルドさん」

「お前、能力者だったのか」

ドルドはこちらに歩き始めるとゆっくりと剣を鞘に納めた

「やめだやめだ、俺じゃ敵わねえわ…てか、俺はお前を殺す気無かったけどな」

その事は気が付いていた、全ての剣よる攻撃は俺に当たる瞬間全て峰打ちに変わって  
いた

ただ峰打ちでも相当痛いだろう

「あああ、俺の剣が真つ二つだよもう」

ドルドは自分の真つ二つに切れた剣の刃の部分と持ち手の部分を持ちながら項垂れ  
る

「あ、それ貸してください」

俺はドルドから剣を貰うと俺はまたスキルを行使した

「錬金術・再生」

剣の節断面と持ち手の節断面をゆっくりと近づけるそして当たる瞬間、先程の光とは  
違いほのかに青白い光が発した

「さあ、直りましたよ」

俺はドルドに剣を手渡す、そこには完璧に修復されたドルドの剣を渡す

「まあありがとな、取り合えず飯取りに行くか？」

「え、でも俺は……」

「お前と剣を交え分かった……お前人を殺したことがあるな？」

その瞬間俺の鼓動が早まる、なぜバレた？確かに無力化するため多少力は出したが……  
「いやいや、別に王国に引き出そうって訳じゃねえ……ただお前の力は俺なんかよりもっと激しい修羅場を渡ってきた、そんな気がしたんだ」

「ドルドさん」

「何か言えねえ訳でもあるんだろ、お前が言ってもいいと思えたとき話してくれ」

ドルドはそう言う俺を手招いて森へ狩りに向かった、夜飯は熊鍋だ、俺はドルドの優しさを嘸み締めながら頬張った

夜飯を食べ終わるとその日は早めに寝た、先程の戦闘で気付かない内に体力を消耗していたようだ、その日は倒れる用に眠りについた

## 虎王と美女

昨日の戦闘で分かったことがある

一つ、スキル《魔術の基本》はただのスキルではなかった

魔術の基本とは魔術を使える用にするための体の構造を入れ換えるスキルだった。

魔術の基本を使ったあともう一度スキルを確認すると魔術の基本は消えていた

二つ魔術の基本を行使した事によって新しいスキルが手に入った

スキル

魔術 《雷》《光》《炎》《錬金術》

この四つだ魔術を鑑定した結果本当は8つの魔術が存在するようだ

炎・水・氷・雷・光・闇・土・錬金術

俺は一通り魔術を確認した

魔術・雷

(雷魔法を使えるようになる、魔力の増加でより魔力消費の大きい魔法が使えるようになる)

魔術・光

(光魔法が使えるようになる、魔力の増加でより魔力消費の大きい魔法が使えるようになる)

### 魔法・炎

(炎魔法が使えるようになる、魔力の増加でより魔力消費の大きい魔法が使えるようになる)

### 魔法・錬金術

(錬金術が使えるようになる、魔力の増加でより魔力消費の大きい魔法が使えるようになる)

そしてもう一つ手に入れたのは

魔力消費減少      レベル C

(魔力の消費が少なくなる、レベルの増加によって消費がより減少)

魔力容量増加      レベル C

(保持出来る魔力を増加させる、レベルの増加によってより増加)

最後にドルドを無力化したとき、俺の頭に鳴り響いた

《ピロリン!!》

と言う機械音の正体

ゼロ 10歳 鬼人族 魔術師

レベル 25

HP 2500 / 2500

MP 4000 / 4000 (+1000)

筋力 1500

耐久 1000

俊敏 750

魔力 3900

スキル

・ 経験値5倍

・ 空間魔力吸収 レベル D↓C《UP》

・ 属性無効化 レベル D↓C《UP》

・ 魔力消費減少 レベル C 《New》

・ 魔力容量増加 レベル C 《New》

固有スキル

・ 言語理解

・ アイテムボックス レベル D↓C《UP》

・ サイレント レベル A



- ・鑑定眼 レベル S
- ・伝承 レベル D
- ・魔術《雷》 レベルC 《New》
- ・魔術《光》 レベルC 《New》
- ・魔術《炎》 レベルC 《New》
- ・魔術《錬金術》 レベルC 《New》

### 称号

- ・転生者
- ・魔道を歩む者 《New》
- (魔力量微回復)
- ・全能神の加護
- (全てのスキルが少し上昇)
- 「ああ、レベル上がってるわ」

目を覚ますと素振りをするドルドを見つけた  
「おはようございませす、早いですね」

ドルドはニヤツと笑うと手に持っていた大きな木刀を俺に降り下ろした  
それを俺は見ながら避ける

昨日とは全然違う体が軽い、昨日は速くて何とか避けていた剣もまるでスローモーションのように見える

俺は敢えて剣の方へ向かいその剣を握る拳を掴みこれ以上下がることを許さない  
「アツハハハハ、やはり昨日は手を抜いていたか！」

全然そんなことはなかった、確かにさばけない事は無かったが相当洗練された技の  
数々だった

「いや、ドルドさんの技は素晴らしかったです、今でも勝てたのが奇跡です」

「おいおい、過ぎた謙遜は嫌みだぞ素直になれ、ハハハ！」

ドルドは笑いながら馬車と馬を繋げている

ゆつくりと出発すると言う事なので俺は技を実験する事にした

「ドルドさん、少し俺運動してきます!!」

俺はドルドに伝えると森へと走った、あんまり遅くなるなど釘を刺された

少し森の奥へ進むと少し開けた場所に出た

俺はまず全ての魔術を試す事にした、前回行った魔術《ファイアウォール》

これは前世の記憶にあるゲームであった技だ、イメージしやすかったため試しにやつ

てみた所、イメージ通りの技が地面から吹き出した

「今度は魔術《雷》を使ってみるか：イメージするのは雷を圧縮させた玉」

俺はまず前世でよく冬に悩まされた静電気をイメージした

「パチン！」

イメージは出来た、次はより大きな静電気

「パチパチ！」

先程より少し明るい光を放つ、更に大きな電気

「パチー！」

うん、いい感じだ更に大きな電気！

そんなことをひたすら続ける、そして何十回目かの時、イメージは雷

今までよりも多く力とイメージを込める、手からパチンツパチンツと白い光が出始める

もつと強く！更に圧縮！先程よりも大きな音が辺りに響く

「パチー！パチー！」

そして力は限界を迎える、手のひら目の前にある大岩に向ける

「サンダーボール!!!」

一気に放出した

「パンツ……ドツツツゴオーン!!!」

激しい爆風と雷光の後に残ったのは跡形も無くなった大岩が在ったであろう場所に出来たクレーターだった、多少頭がクラクラしたが直ぐに治る

「あれ……? 威力高すぎね?」

所詮C級の魔術の筈だがこの世界のC級はこのレベルなのか?

俺はそんなことは無い筈だと思ひ他の魔術も試した

前回使った魔術《炎》を高圧縮した《ファイアボール》

魔術《光》をレーザーのように圧縮させた《レールガン》

魔術《錬金術》を使い鉄の連続生成

とうとう立派な純鉄のオブジェが出来上がる

変わらず他の魔術は最初の魔術《雷》と同じ威力、何故だ?

俺は理由を探した

スキル

・魔術

《魔力の消費量に伴い高威力の魔術を使用、魔力が切れると一定のクールダウンが必

要》

うん? つまり何だ? 高威力の魔術を使うためには大量の魔力が必要で使いきると

クールダウンとして魔術が使えなくなると

納得した、俺の魔術が以上な火力がある理由が分かったのだ

だがまだ確証がない、俺はステータスを表示したまま魔力を集中させる

「光魔術……レールガン!!!」

俺は右手の人差し指を銃のように形作り指先から一筋の光を放つ

光は約500メートル程離れた大岩に直撃、大岩は粉々に吹き飛んだ

ステータスに表示されたのは

MP 4950 / 5000

魔力 1950 / 3900

「やっぱり、魔力の注ぎ過ぎか!!!」

その時、体何かが入ってくる感覚がした

「何だ？体が温かい？」

そしてみるみる内に魔力とMPがたまり僅か数秒で満タンになった

「今のが《空間魔力吸収》と悪鬼王のローブの付与スキル《魔力回復・大》称号の《魔道を歩む者》による魔力回復か、このレベルだと一瞬だな」

俺はそれから何度か技の練習をするとドルドが迎えに来た、訓練現場を見たドルド

が、俺は何も見えない！

と言いながら馬車に帰っていったのは言わないで置こう

「んじゃ、そろそろ王都に向かうか！」

ドルドは馬に鞭を打ち走らせる、この世界の馬車はちよつとした段差でも大きな揺れがおこる、その度に尻を木の板に強打してとても痛い

馬車に揺られ尻を打ち付け約1時間、ドルドさんが何かに気付いた

両脇に生い茂る森の中から聞こえる叫び声と何かの雄叫び

「ドルドさんー！」

俺はその声があった事では無いと感じとりドルドに声を掛ける、勿論助けに行くためだ  
「ダメだゼロ…行つてはいけない」

ドルドは今までに無いような真剣な眼差しでゼロを止めた

「この島にはそれぞれ四方の森を支配、守護する種族がいる、東の森、《桃源郷》を支配する傲慢なる鼠王《ベニート》

西の森、《天空樹》の支配者、冷酷なハンター鳥王《バルドラ》

南の森、《薬師木》の守護神、慈愛の猿王《セラト》

そして北の森、《千年花》の守護神、暴虐の虎王《ドラガル》ここは北の森、千年花の群生地《ガルドラ》のテリトリーからは離れているが北の森と言うことは…」

ドルドが口を閉ざすとゼロは迷わず馬車を降りた

「それでも俺は…守れる命は守りたい」

そうドルドに告げると森の中へ駆け出した、ドルドが止めるほどの怪物、今の俺で勝てるのか直ぐ様固有スキル《サイレント》を使う

さつきまで逃げ惑っていた森の動物たちは俺が横を通り過ぎても気がつかない  
何となく猟師とかになったら楽に稼げそうだな〜とか考えてしまう

そうこうしている内に声が聞こえてきた

「はあ…はあ、やつと巻いたかしら？」

女だ、紫色のロングヘアで服装は全身真っ黒のスパイスーツのようだ

俺は慎重に距離を詰めていく、回りにガルドラがいるかもしれない…女は未だ直足を止めず森の中を走っている、俺が声を掛けようとした瞬間、奴は現れた

「グオオオオオオオ!!!」

虎王《ガルドラ》全身を漆黒の毛で覆われ両方の腹には赤い爪のような模様が二本  
ずつ引かれている、体長は3.5〜4メートル程だろう大きい

そして長く伸びた爪はまるで鍛え抜かれた名刀のような黒光を放ってる

何よりもこの威圧感を出しているのはその凶暴な顔つき、その頭部には赤い双角が見えた

「キャアアアアア!!!」

俺は直ぐ様レールガンをガルドラの頭部に放った、しかし

レールガンが当たると直前ガルドラは後ろに飛んだ、レールガンの白い光線はガルドラに当たること無くその射線上にある木々をなぎ倒した

「ナニモノダ!!!」

突如発せられたの声、今ガルドラ何者だ!と言ったか?

「スガタヲアラワセ!」

どうやらサイレントが効いていて俺の姿は見えていないようだ、だが見えていないのに俺のレールガンを避けたとなると……まず勝てないだろうな

「何?何なの!」

ガルドラに追われていた女性はまだ呆然としている、それはその筈、逃げ切ったと思っただけ突然ガルドラが現れ殺されると思っただけ今度は光の線が森を破壊したのだ

俺は森の木々に隠れながらガルドラを鑑定した

ガルドラ(仮) 15歳 虎王族 守護獣

レベル 120

HP 57000 / 57000

MP 0 / 0

筋力 72000



耐久 100000

俊敏 50400

魔力 0

スキル

虎王の威厳 レベル A

(獣を自分の配下にする、自身のレベルが上がるにつれて配下もレベルが上がる)

集団戦術 レベル A

(集団での戦術が使えるようになる、レベルが上がるに連れてより速く行動できるようになる)

追跡者 (使用中) レベル A

(一度嗅いだことの有る匂いを辿ることが出来る、レベルが上がるにつれて距離も増える)

固有スキル

断罪の剣 レベル A

(自分の持つ筋力・耐久・俊敏すべての数値を足した攻撃を放つ虎王族最強の技)

変化 (使用中) レベル S

(自分の体を獣に変える)

「ああ、こりや勝ねえーわ」

俺は隠れながら戦って勝てない相手だと言うことを理解し覚悟を決めた

「固有スキル《伝承》！」

ゼロは迷わず自身のスキル《サイレント》を謎の女性に伝承した

その時ゼロの姿はドラガルの前に晒された

「ナニ！キサマドコカラアラワレタ！」

「さあ、どこだろなあ？」

俺は震える手を必死に抑え込む：ビビってる訳じゃあない むしろ逆だ！

「久しぶりだなあ、こんなに面白そうな奴と会ったのは」

「ちよつと君！危ないから逃げなさい！」

俺の後ろで騒ぐのは先程からガルドラに追われていた女性だ、面倒だ少し鑑定しよう

…名前と職業だけでいつか

時間が勿体ないからさっさと鑑定した

カリーナ 13歳 人間族 泥棒

「は!?お前泥棒かよ！」

「え！あ、いや違うわ！」

完全に嘘をついているのは分かるが…だがここで俺が逃げればこいつは確実に殺さ

れるだろう

「あぁー！もういいから俺の言うことを聞け！心の中でも叫んでも良いから取り合えず《サイレント》と叫べ！」

「は？何でよ！良いから逃げなさい！」

「うるさい……さっさとしろ！」

カリリーナはゼロの深紅の瞳に睨まれ言葉を失つう、それでもそこそこ修羅場は渡ってきた自信があった、ついこの前だってトレジャー海賊団から逃げ仰せた

しかし目の前に立つ自分より小さいで在ろう少年は、自分よりも大きな怪物を前に一歩も引かずにいる、その瞳にはカリリーナとは比べ物にならないほどの修羅が浮かんでいた

「は……い、さ、サイレント！」

その瞬間カリリーナの存在を感じなくなった

「今すぐ街道に向かえ、そこに馬車がある筈だその近くにいろ、必ずだぞ！」

見えないカリリーナに向かって叫ぶ、同時に後ろの草が揺れる

「キサマー！アノオンナヲドコニヤッタ！」

「それは後で教えてやる、じゃあ始めようか！」

## 決闘と逮捕

全身を流れる血が熱くなる、こんな感覚は久し振りだ

「まあまあ、そんなことより俺と遊んで行けよ」

俺がフードを取ると赤き双角が露になった、一瞬ガルドラの顔が鈍る

俺はゆっくりと魔力を集中させる、ガルドラもゆっくりと俺との距離を詰めていく

「お前の他にも後4匹居るらしいな、そいつらとお前だどどつちが強いんだ？」

俺は残りの四聖獣に興味が湧いていた、もしもこいつよりも強い奴がいるならいつか

殺り合いたい

「ワレコソガヨンシユゾクサイキヨウノセンシナリ!!」

そこにはゼロの望む答えは無かった、しかし今はこの強者との時間を楽しむとしよう

「じゃあ…始めようか!」

ゼロは右手を付きだしレールガンを打つ、光の早さで飛ぶ破壊の閃光がガルドラに近

づく

ガルドラはその巨体を横に滑らせ紙一重で避ける…いや敢えて紙一重で避けている、

そんな余裕感が漂う

また両者動きが止まる、しかし今度はガルドラがその沈黙を破った

体をジグザグに揺らしながら高速で近づいて来るガルドラ、ゼロはそれを正面か受け止めた

「ファイアウォール!!!」

目の前に現れた炎の壁に一瞬たじろぐガルドラだったが直ぐ立て直し構わず炎の中へ突っ込んでくる

炎の壁にガルドラの黒爪が突き立てられた、ファイアウォールは容易く貫きその赤き双角を突き出す

狙い通りだ、ゼロは溜めていたサンダーボールを双角にぶつける、速度は死なずゼロは後ろに吹き飛ばされるがファイアウォールから出てきたガルドラは微かに体から煙が立ち上る

だがそのたたずまいはゼロの込めた魔力等全く効かないと言うような姿、正しくこの島の覇者の風格

「…クソがー、これならどうだー!」

俺は、悪鬼王の小太刀を抜きガルドラの胸辺りを横に薙いだ、飛び散る鮮血、しかしその傷は浅くとても致命傷とは成らない

ガルドラはこの小太刀から発せられる気配に危険を感じとりギリギリの範囲で避け



を全力で投げたのだ

その一瞬の出来事にもガルドラは反応した、振り下ろしていた手を止め地面を横に蹴り回避行動をとる

しかし今回は距離が近すぎた、ガルドラの腹部を狙った破槍は少しずつ肩から激しく鮮血を散らした

「まだか！オラアアアア！！！」

ゼロは錬金術により首輪を錬成、体勢を崩したガルドラの首へと飛び乗る

「ふあー！」

何か聞こえた気がするがそれどころではない、俺はまだ体勢を崩し動けないで居るドラガルの首に鋼鉄製の首輪を掛け鎖を辺りの木々に手当たり次第巻き付けた

「どうだー！」

ゼロの叫びにガルドラは答ええない

「……け」

いや何か言ってはいる

「何だつて？」

「……けだ」

「いや、全然聞こえない……」

「私の負けだ！行け！」

突如発せられたガルドラの敗北宣言だった、俺は何が何だか分からないがこれ以上戦わなくて済むならそれに越した事はない

俺は動かないガルドラに背を向け街道へと駆けた

《ピロリン!!ピロリン!ピロリン、ピロリ……》

始まった、その機械音は街道に出るまで続いた

「ドルドさん！」

街道に止まっていた馬車まで来ると、そこには重装甲に固めた騎士、約百人程が馬車を中心に囲んでいた

「生まれ！何者だ！」

ゼロは突如重装甲兵に止められた

「私の名前はゼロ、あなたたちは？」

ゼロは自分を止めている兵士に尋ねた、その手には槍、剣、大斧、メイス、そして杖？

剣兵30人・槍兵10人・大斧兵15人・メイス兵15人・杖兵30人

ざつとこんな感じか？

「それにはこの私が答えよう！」



馬車の辺りから出てきたのは白銀の鎧に身を固めその手には純白の一メートル程の杖、腰にはレイピアが差されている

「我が名前はアルドルファー・ロマード、ロゼーノ王国第三騎士団の団長をしている、さあこの私がお前のような農民風情に名を名乗ったのだ貴様も答えるが良い」

明らかにボンボンのようなこの男、試しに鑑定しといた

アルドルファー・ロマード 25歳 人間族 剣士&魔術師

レベル 13

HP 570 / 570

MP 30 / 30

筋力 120

耐久 100

俊敏 210

魔力 35

スキル

傲慢 レベル C

(自分が使う体力を極力人に肩代わりさせる、レベル上がるにつれて肩代わりさせられる量も増加)

胆力強化 レベルC

(自分に対する暴言等による精神攻撃を減少、レベルが上がるにつれて減少値が増加)  
固有スキル

魔術《氷》 レベルD

(氷魔法を使えるようになる、魔力の増加でより魔力消費の大きい魔法が使えるようになる)  
プラス思考 レベルB

(様々な事柄に対して全てプラスに受けとる、レベルが上がるにつれて思考増加)

称号

ロゼーノ王国第三騎士団団長

ああ…何かめんどくさそうなスキルが多いな

「私の名前はゼロ、この馬車に乗っていた人に王都まで連れていってもらう途中です  
「貴様のような農民が何をしに王都へ行くのだ！」

俺は錬金術を使い直ぐ様ローブの中から手紙が出てきたように見せかける

「この手紙を王都へ届けに行きます」

俺が手紙をローブの中で錬成し見せると、アルドルファーはフンツ！と顔を反らした  
「まあ良い、我らの望みは達成された…おい！」

すると近くにいたアルドルファーの部下らしき男が何かを引きずってきた、その首には首輪と鎖が繋がっていた

そこにいたのは紛れもなく先程助けた女カリリーナだった

「その女が何かしたのですか？」

「こいつは我々ロゼーノ王国の宝である花々の生育法を纏めた物を王宮から盗んだ大罪人だ、よって身分を自由民から奴隷へと落とす!!」

奴隷…、名前を聞く限り良いとは言えない身分だろう、カリリーナは一度俺の方を向いたて…少し微笑んだ？、そう思ったら直ぐに鎖を持つ兵士を睨んだ

「さあ、行くぞー！」

弛んでいた鎖がジャラジャラと音を立てながら伸びきる、同時にカリリーナは引きずられるようにフラフラと歩き始めた

「おー！」

俺は声を上げてしまった

「お前…本当に盗んだのか？」

俺が尋ねるとカリリーナは

「私は盗んでいない」

その顔には嘘を付いている様子は微塵もなく、ただ自分の潔白を証明していた

「貴様！まだ言うか!!!」

鎖を持つ兵士が持つていた鞭を振りかぶりカーナ目掛けて振り下ろす

「レールガン！」

ゼロの指から放たれた細い光線は兵士の腕を容易く貫通させた

「ぎゃあああああ!!!」

辺りの兵士たちは何が起こったのか分からない様子だったがアルドルファーはいち早く気が付いた

「その男を捕らえよ！」

アルドルファーの声に反応する兵士達、だが動きが遅すぎる、俺はカーナの鎖を持つ兵士を蹴り飛ばしその鎖を握った

「貴様！農民風情がこんなことをして只で済むと思うなよ！」

ゼロの中心に剣兵が取り囲む

「その農民風情に罪人を取られた間抜けどもは誰だ？」

ゼロがそう言うのと剣兵達が一齐に襲い掛かってきた、全身を鋼鉄の鎧に固めた兵士達に向かってくるだ恐怖でしかない

「ファイアオール!!!」

ゼロは前方に炎の壁を作り出した、何人かの兵士が回避が間に合わず餌食に為った

「こいつ、魔術師か！」

俺が魔術師と分かると剣兵・槍兵・大斧兵・メイス兵が俺を中心に周りを囲む、そしてその外側を杖兵が囲んだ

「奴の右腕を見ろ！何故かは知らんが深傷を負っているゆつくりと着実に攻めろ！」

それから兵達は必ず一斉に5人以上で襲ってきた、流石に俺一人なら何とか成るがカリーナを庇いながらでは一人二人ずつしか倒せない、しかしこのままなら殺られる事はないだろう

その時…

「炎よ、我が望みに答え矢となりて敵を穿て《炎矢》」

一人の魔術師から放たれた矢は俺の背中に突き刺さる

「んっ？」

少し背中に痛みを感じた様な気がするが…うん、問題なし！な

「何だと！完全詠唱の魔術だそ！」

「次はこつちから行くぞ！《降り注ぐ鉄槍》」

今回の戦いでゼロはまだ全力で魔術を行使していなかった。

レベルが上がった今ゼロが全力で魔術を使った場合どれ程の範囲に被害が出るのか分からなかったからだ。

だがこの技ならある程度力がある者なら生き残るだろう

俺は折れていない左腕を上にもむけて魔術を使った

「おい、何も起こらないぞ…」

一人の魔術兵がそんなことを言った次の瞬間、青空が黒く埋め尽くされた、ああ、流石に魔力全部注ぐのは失敗か？

《ズドドドドド…!!》

半径500メートル程に降り注いだ鋼鉄の雨は地面を黒く染めた、生き残ったのは氷でシエルターのような物を造り出したアルドルファーと数人の部下のみだった

「こ、こんなことが…ありえない私はロゼーノ王国第三騎士団団長・アルドルファー・ロマードだぞ！この私が率いていた騎士団が数名残して全滅何て…嘘だああああー！！」

アルドルファーは戦意を失ったようだ、残っている兵士達もどうして良いのか分からずアルドルファーの側でオロオロしている

「さて、話を聞こう…か？」

俺が振り向くと、先程までフラフラながら立っていたカリーナが地に伏せていた

「おい、どうした！」

カリーナを抱き上げる、脈をはかる…まずいどんどん弱くなっているこれは

「毒……か？」

俺がアルドルファーの方を向くとアルドルファーはニヤリと笑うと

「取引しよう、その毒の解毒法を知っているのは私だけだ、お前が大人しくすると約束すればその盗人も助けてやろう」

最早考える間でもない、俺は大人しくすると約束しアルドルファーから手錠を掛けられた

《ウグツ！》

手錠を掛けた瞬間、アルドルファーはいきなりゼロの腹部に蹴りを叩き込んだ

「この……クズが！お前ごときがこのアルドルファー様にたてつこうなんぞ！百年！早いんだよー！」

2度3度と蹴りを全身に受けるゼロ、何故だ……魔術が使えない

「その錠は魔封鋼から作り出された対魔術師専用の拘束道具だ、これで魔術を使うことは出来ない！」

「くっ！約束は……果たせ！」

俺はアルドルファーに向かって叫ぶ、するとアルドルファーはニヤリと笑らい

「約束……？ああ、あの盗人の毒を抜くって話か、勿論やってやるとも、ギリギリ王都までたどり着ける程度にはな」

それからアルドルファーは部下に薬草を取りに行かせ調査した薬をカーリーナに少し飲ませた

「さあ、行くぞー！」

騎士団の馬車は先程の攻撃で全てボロボロに成ってしまった、代わりとしてドルドさんの馬車を使われる事に成った

ドルドさんは俺の方をチラリと見ると直ぐに目を背けた、この状況で俺を庇ったらドルドさんまで悪くなる、正しい判断だ：

「ところでお前何故ローブで頭を隠している」

アルドルファーが荒くゼロの頭からフードを脱がす、同時に赤く染まる双角が現れた  
「その角は…貴様！呪われ人か！」

俺は蹴り飛ばされ地面に転がる、その隙にカーリーナの口からこぼれた解毒薬に触れる  
「貴様は騎士殺害罪・身分偽造罪・罪人擁護罪・呪人殺害法に乗っ取り王都に連行する!!!」  
それから俺は首輪を付けられ馬車の後ろに繋がれた



## 虎王族へ

ここは花の都、王都・サレマ、町の造りは中世のヨーロッパ、レンガ作りの建物が建ち並ぶ。

その中一つの行列が王城までの道のりを練り歩いてた

「見ろ町の衆これがあの呪われ人！そしてこの王国の秘宝を奪おうとした大罪人だく!!!」

アルドルファーは有ること無いこと言いふらしている、部下達は俺に喰い殺されたやら、カリーナに騙し打ちされたやら

「見てあの角、気持ち悪いわ……」

どこからかそんな声が聞こえてきた、同時に何処からか石が飛んできた、石は次々投げられた

王城は白い5メートル程の城壁に中途半端な掘り、門も一番外に近いと言うのに木製だ厚さも50cmも無い、正直お粗末過ぎる城だ

しかし、芸術と言うのであれば素晴らしい

「どうだ、この美しき城は!!!」

アルドルファーはこの城で満足しているようだ

「ああ、スゴいなー(棒)」

適当に受け流すとアルドルファーはニコニコしながら

「そうだろう、そうだろう本当に美しき城だ!!」

こんな中、馬車は王城へと入って行った俺とカーリーナは王城の地下にある牢へと投獄された

「遅くとも明日の朝には判決が下る、早ければ夕方にもなそれまで残りの命を牢獄で楽しく過ごせ、ハツハツハ!!」

アルドルファーは俺とカーリーナを同じ牢に閉じ込め高笑いしながら地上へ続く階段を上がって行った、牢の前には二人の兵士が見張っている

「う……ん?」

その時カーリーナが目を開けた、しかし今だ息が荒く苦しそうだ

「ハアハア、あ……あなた何でここに?」

カーリーナは今いち状況が分からないようだ、俺は何があったのか説明するとカーリーナは申し訳なさそうに謝ってきた

「ごめんなさい、私のせいであなまで……」

「いや、俺が決めてやった事だ謝る必要は無いそれに」

俺は手錠を横に捻ると《バキッ!》と言う音を立てながら粉々に砕け散った、直ぐ様錬金術《錬成》を使ったあの石で出来た手錠を自分に着ける

兵士達が何の音だと覗いて来たが手錠を着けているので問題なしと思われたようだ

「俺の魔術、錬金術は大きく分けて三つの力がある《解析》《錬成》《付与》今回は解析の魔術を使い魔封綱を解析、効果を無力化した」

カリーナは何が何だか分からないようだ、今回の手錠は魔力を手錠の中に押さえ込む力があつた

だからアルドルファーに攻撃しようと思つても魔術を使うことは出来ても放出出来ないから攻撃できなかった。

だから手錠内で錬金術を使いゆっくりと解析していった、最初は内側から手錠を壊すことも考えたが狭い範囲では壊すほどの火力が出せない

錬金術《解析》なら少しずつなら確実に手錠の効果を無力する事が出来た、まあ解析に時間を多く取られこんな時間に成つたが：

「まあ、先ずはお前の毒の治療からだ」

俺は錬金術で中に解毒薬を入れたコップを作り出した、ついでにアルドルファーの兵士達が使っていた謎の薬品も入れといた、怪我をした兵士が使うと直ぐに傷が治つていたので恐らく回復薬？

カリーナはおそろるおそろるコップの中身を飲み干した

「何……これ、体の疲れが一気に治った？」

カリーナはまた何が起こったのか分からず困惑していた

「カリーナ、もしかして魔術って知らないのか？」

俺がカリーナに聞くとカリーナは首をかしげた

「魔術？んん聞いたこと無いわね」

「じゃあ何でこの島に来たんだ？」

それから俺はカリーナがこの島に来た経緯を聞いた、纏めるとこんな感じだ

・ イーストブルー《東の海》でトレジャー海賊団の宝を盗もうとする

←

・ ナミと言う同業者と再会

←

・ トレジャー海賊団の隙をついて宝物奪う事に成功

←

・ 取り分でナミと喧嘩、トレジャー海賊団にバレル

←

・ 交渉により脱出成功、タイミングを見てナミを助ける

←  
←  
・ 囿になってナミを逃がす

・ トレジャー海賊団に追い回される、逃げ込んだのがグランドラインのこの島

「まあ、ナミから航海の基本とかグランドラインの話とか聞いてたから命をからがら島にたどり着けたわ

最初は隣の島に向かったんだけど、着いたら変な大口男に追いかけられるわ、山に逃げ込んだら大兎に追いかけられるわで、この島に逃げてきたのよ」

色々危なそうな単語が聞こえてきたけど……気のせいかな！

それから分かったことは魔術を使えるのはどうやらこの島の人々だけということ

そしてカリーナはこの島に狙って来た訳じゃ無いことだった

「ハァー、でもそんな力があるなんて初めて知ったわウシシ♪」

俺はそれからカリーナとどう逃げるか話した、三方を魔封網の壁に囲まれ前には覗き窓のみの鋼鉄の扉本気でやればこんな牢屋粉々に出来ると思うけど……カリーナも粉々に成りそうだしなあ〜

そんなことを考えながら指をパチツとならす、同時に炎の玉・雷の玉・光の玉が指から離れてくるくる回る、暇潰しに魔術操作の練習だ

「わああ、綺麗ね！」

カリーナは目を輝かせながら光を目で追っている、薄暗い牢が幻想的な三色に満たされる

その時

(これは…ですが私どもは…申し訳あり…感謝…)

突然扉の前にあつた人の気配が二つとも遠ざかつて行つた、同時に一つの気配が近づいて来た

《ガチャ!》

ギーと音を立てながら重い鋼鉄の扉が開かれた、目の前に立っていたのは「出てください」

銀髪の少女だった、軽くなびく髪は美しく薄暗い松明の光を反射し光を放つ俺は反射的に鑑定を行つた

セリア 9歳 人間族

レベル 5

HP 20 / 20

MP 35 / 35

筋力 15

耐久20

俊敏7

魔力100

スキル

・魔力伝達 レベルD

固有スキル

魔術・水 レベルC

称号

・王宮付きメイド

・覇者 レベルD

・覇道を歩む者 レベルD

ん？何だこの見るからにヤバそうな称号は…

まあ出してくれると言うのだから問題ない、俺とカーリーナは辺りを警戒しながら外に出た

「君は？」

俺が訪ねると少女は

「この城で働かせて貰っている者です、あなた達は秘宝を盗んだ罪で投獄されています

よね?」

「ああ、そうだ後騎士の虐殺容疑もあるがな」

「少なくとも秘宝を盗んだ犯人は捕まりました、ロゼーノ王国第一騎士団団長・ミロ・カバロ様が朝方捕らえて来ました、秘宝も一緒です」

「ん?ならここに居ても同じじゃないか?」

俺が訪ねるとセリアは首を横に振った

「あなた達を捕らえてきたアルドルファーと言う男、この報告を受けると何とカバロ様が捕らえてきた男を偽物だ、本物は俺が捕らえてきた奴等だといいい処刑を強行しようとしています、ここから逃げて!」

俺とカリーナはセリアの後について牢屋の階段を駆け上がる…遅かった

「逃がさんぞ!殺人鬼め!」

アルドルファーは手を上げる、同時に魔術兵が詠唱を完了させていた魔術を放った  
五つの光がセリアに直撃する筈だった

「雷鳥!!」

セリアの背中から飛び出した蒼白い鳥は五つの光にぶつかり消し飛ばした

同時に魔術を放った魔術師を吹き飛ばす

「おい!いきなり何するんだ?」



「くっ！うるさいうるさいうるさい！この怪物！化物め！この大量殺人鬼が！」

アルドルファーは詠唱を始めた、嘘だろ？

「レールガン！」

アルドルファーの左肩を撃ち抜くと地面に転げる、敵を前にして詠唱を始めるとかこいつは馬鹿なのか？

「うああああああ！！私の…私の肩が…！！！！」

アルドルファーは地面を這いつくばりながら外へと逃げ出した、その時

《カーーン、カーーン、カーーン、カーーン》

鐘の音が王都と王宮に響き渡った、同時にアルドルファーが逃げ出した外へと続く扉から王城の城壁が砕ける姿が見えた

城壁が砕け舞う土煙の中現れたのは体を布で隠した黒髪の女の子しかし腹部や足等、所々露出している、それは真っ直ぐこの牢へ続く扉にむかってくる

「お、おい貴様…丁度良い私を助ける！褒美は沢山やる！」

アルドルファーは何を勘違いしたのか明らかに自分に敵意剥き出しの少女に助けを求め

「何をしている！早くしろ！！」

「…黙れ」

黒髪の少女はアルドルファーを掴むとその小さな体で持ち上げ城壁へ投げ飛ばした  
少女はまた向きを代え俺達の方へ歩を進めた

「助けに来ました……主人様♪」

「へ？」

少女はその黄金に輝く瞳でゼロを見た、その顔は触れば溶けてしまいそうなほど白く  
すらりと伸びた腕と腰布から少し見えている細い足

そして胸布の下に除くお腹には赤い爪痕のようなものが両わき腹に二本ずつ引かれ  
ている、その顔立ちはこの世の物とは思えないほど美しく可愛らしかった

「君は？」

少女はニコリと微笑むと

「話は後でゆつくりと、今は」

少女は1歩後ずさると眩い光を放った

「セナカへ」

光が収まり現れた姿に絶句した、それは紛れもなく虎王《ガルドラ》だった

伏せて俺が乗りやすいように待っている、その姿を見る限り敵意は無さそうだ

俺はここから逃げるためガルドラの背に股がる、ふわふわの毛が心地よく高級なソ  
ファーに座っているようだ、俺に次いでカリーナも股がる

「グルルル…」

ガルドラは渋々カーリーナを乗せ駆け出した、壊れた城壁をくぐり抜け森へと駆けた、その恐ろしい程のスピードに魔術師の攻撃は空を切った

暫く森の中を走ると一面が青紫の花畑に出た、そこでガルドラは止まったりカーリーナを振り落とし、ゼロを慎重に降ろした

「ここが私たち虎王族の住む聖域《千年花の森》です…ご主人様」

「所でなぜ君は俺を助けたんだ？」

ガルドラはゼロを見て虎王族の掟を話始めた

「私達虎王族は強いものが全てで族長もこの群れで一番強いものが成ります、私は族長の娘で今現在ここに住んでいる虎王族の中で二番目に当たる強さを持つ副族長の座に居ます、しかしこの地位に私は自分の爪と牙で上がってきました

そして何時ものように《千年花の森》を警備していたら侵入者を見つけ排除しようとしたらあなたに敗れました。」

「それは…何と言えば良いのか…」

「いえ良いのです！その代わりに私はあなたを見つけました、ここでは男に倒された女はその男の嫁に成るのがしきたりです、今まで私に戦いを申し込んできた男の方々は全て倒してきました、そして何時の間にか副族長です…」

そこでやつと俺は理解した、だが…

「でもお前、俺との戦いの中いきなり戦うの止めたよな？」

「そ、それは…あんな贈り物や大胆な事をされたら私…」

少女は頬を赤らめながら、ゼロを見た、うん可愛い

だけど贈り物何て上げたっけ？

俺は記憶を呼び起こした、腕折られて覇槍で怯んだ隙に首輪で…：…あ

ゼロがガルドラの首を見る、銀色に鈍い光を放つ輪がはまっていた

「これスゴいですね、体が大きくなると首輪も大きくなるし小さくなればこれも小さくなるし」

ガルドラは興奮した様子で話続けている

「来たか…：…」

突然森の奥から声が聞こえた、地を揺らすような声に俺は目を向けた

森の奥、虎王族の在るであろう集落から出てきた巨大な虎、身の丈は約8メートルのように越していた、腹に刻まれた赤い爪痕は3本ずつ両わき腹にあった

「ワシがこの群れの長ガルドラじゃ」

…ええ？

「あなたがガルドラ？」

「左様」

「娘さんは？」

「娘はまだガルドラではない」

どうやらガルドラとは虎王族の長が、代々名乗る名前で一番強いものが倒されたときそいつが新しいガルドラに成るらしい、そして長に挑戦する権利を持つのは次に強いものの、つまり俺にが倒したこの少女だった

「だからガルドラ（仮）って成ってたのか」

「さて、お主は我々虎王族の中で二番目に強い我が娘を倒しその地位を勝ち取った、よつてここにお主を虎王族・副族長に認める」

その瞬間森の奥、虎王族の集落から歓声が上がったそれからぞくぞくと凶悪そうな虎が現れた

「お前が新しい副族長か、宜しくな！」

「あの娘も頑張ってただけどねえー、まあしつかりね」

虎達は次々と人の姿に代わり俺を受け入れていた

「いやいやいやいや、良いんですか？私はあるあなたの娘を倒したんですよ？」

「勿論この集落に入る前にワシは直々にお前を観察してた、隣にいるその人間を助けようとする働きもな、その結果お前はこの村に入れても大丈夫と言うことに成った、各長

にも連絡しておる」

俺は困惑しながらも他に行く場所はない、王都も恐らく手配書が回るだろう、他の町にも回る事を考えると…

「では…暫く厄介になります」

そう言いながらガルドラの後を着いていく、後ろからあのガルドラ（仮）の少女も付いてくる、俺は意を決してガルドラに尋ねた

「あの、ガルドラさん…あなたの娘さんが私と結婚すると言っているんですがそれも良いですか？」

「う、うむ、強いものに嫁ぐ、それが我ら虎王族の掟、娘がそれに嫁ぎたいと言っているなら尚更だ…：…よろしく頼む、ただもしも我が子を不幸にしたらその命をもって償って貰うがな…」

俺はガルドラの後に付いて森のなかに入り青紫の花絨毯を抜ける、そして直ぐに見えてきたのは虎王族の集落だった

道は石畳のような物で覆われており建ち並ぶ家も木ではあるがしつかりとした作りをされていた、俺とカリーナはガルドラ（仮）の家に住むことになった

「カリーナ、お前は自分の故郷に帰った方が良いんじゃないか？」

「いいえ、私借りを作らない主義なの…：それに君とも離れたくないし…」

「え？」

「う、ううん何でもないわウシシ♪」

俺はガルドラ（仮）を向いて話始めた

「なあ、本当に俺が旦那で良いのか？まだ俺達若すぎないか？」

「勿論今すぐ…その、け、結婚すると言う訳じゃないです

、いや、別に嫌な訳じゃ無いですよ？」

むしろ嬉しいくらいで…でもまだあなたのこと良く知らないし、だから私は婚約者と  
言うことにして頂けないでしょうか」

「う、うん、それはそうだけど…」

「私、嬉しかったんです…今までこの村では強さこそが全てで欲しいものは力づくで手  
に入れる。」

でもあなたは、その人間を助けるため明らかに私の方が強いのに立ちはだかり戦いを  
挑んだ、そして私を倒した

その時に私はこの人を支えて生きたい、この人が困ったら私が助けてあげたいと思っ  
たんです…だからお願いです私をあなたの婚約者にしてくれませんか？」

「もしかした、傷つけるかも知れないぞ？」

「そしたら、その分私があなたに甘えさせて貰います」

「他に好きな人が出来るかも知れない」

「そしたらその人も愛してあげてください、そんなあなたが好きです」

「裏切るかもしれないぞ？」

「その前に私があなたを助けます」

少女は黒髪を耳にかけながらその優しい黄金の瞳で俺の深紅の瞳を見据えている、俺の心は決まった

「分かった：俺は君を命を懸けて守る、決して不幸にしないと誓おう」

俺がこう言うと少女はニコリと微笑むとその黄金の瞳から二つの雫が流れた

「はい：よろしくお願ひします：ご主人様♪」

「だがガルドラ（仮）って呼びにくいなあ、勝手に名前つけて付けちやダメなのか？」

「いえ、多分問題なかったと思いますけど…」

「なら、その嫌じゃなかったら俺が名前を付けて良いかな？」

「え！は、はい勿論！良いんですか？」

「ああ、それじゃあ…」

俺は暫く考えると一つの名前が浮かんだ

「君の名前は《キトラ》何てダメかな？」

「キトラ？」



「キは俺が鬼人族だからトラは君が虎王族だから合わせてキトラ、俺と虎王族の架け橋に成つてくれるような存在」

「はい！私はキトラです！」

それから俺はキトラとガルドラの元に行き婚約したことを伝え、この種族の長年の問題である種族問題を聞かされた

この問題を副族長の俺に何とかしてもらいたいらしい、副族長になって初めての仕事だしっかりやりたい

こうして虎王族との生活が始まったのだった

## 種族問題

目を開けるともう見慣れた木製の天井、俺は何時ものようにベッドから降りると水瓶に入っている水で顔を洗う

まだ日も昇りきっていない内に俺は準備体操を手早く終えてこの村のパトロールだ、一通り家々を回り何も異常がなければ今度は千年花の森、しかしその頃には俺の後ろには黒い影が五つ程並走していた、何か言い争いながら

「おはようございませす！ゼロ様！」

「ゼロにいいおはよー！」

「もおく、今日最初にご主人様に挨拶するのは私って言ったじゃないですかあー!!!」

「まあまあ、キトラちゃん尻尾下がってるよ〜ウシシ♪」

「主よ、今朝もお元氣そうで何よりです」

「ああ皆おはよう、さあいよいよ今日が船出の日だ各族長達に合いに行くぞー！」

《はっ！》

《はーい！》

《はい》

《楽しみいゝウシシ♪》

《承知！》

俺がこの島に転生して今日で丸六年俺は16歳になった、この五人は俺がこの6年間まあ仲間に成ったのは四年前だが：俺が虎王族の族長に為ったのは

俺は四年前その時代の虎王族の族長ガルドラに戦いを申し込だ、と言うのもそのガルドラ本人が夜中に突然我が家に押し掛けて来ていきなり

《ワシと戦ってくれえゝ!!》

涙目に成りながら訴えて来たのだ、訳を聞くとガルドラの長女《セト》に孫が出来てや々と話せるように成った時に祖父ガルドラに言った一言が

「怖いおじさん」

だったらしい、どうやら俺との稽古や他の村人に怒っている姿等、怖い姿しか見てこなかったようだ、そして本人も

「村のために孫より村をとり今までしつかりと孫と遊んでこなかった、このまま孫が大きくなる姿を近くで見れないのもういやだ！」

とのことだったので、いきなりその次の日ガルドラとの決闘に成ったのだった、ガルドラも現役族長としての最後の仕事だと本気でぶつかってきた

それこそ本当に何度か死にかけた程だ、勝負は丸二日に渡りギリギリの所で勝った

「見事だこれでワシは孫と…フツフフ、じゃなくてこれでお主はこの虎王族総勢百二十三名の長と成った、これよりお主の名はゼロ・ガルドラと名乗るがよい」

それから俺は種族問題を解決に動き回った、まあ種族問題は予測していた通り《どの種族が最強か!!》だったので俺は四種族

・虎王族・鳥王族・鼠王族・猿王族

を集めそれぞれ一人ずつ戦士を出し合い決闘で白黒つけた

虎王族からは勿論族長の俺が

鳥王族からは前ガルドラの代から代わらない鳥王《バルドラ》

鼠王族からも前ガルドラの代から代わらない鼠王《ベニート》

猿王族もまた代わらず猿王《セラト》

最初に戦ったのは俺と鼠王《ベニート》だった、鼠王族はその凄まじい耐久力に驚かされた、体長は約3メートル程、全身を白銀の体毛に覆われており如何なる攻撃も受け流した

ベニート 120歳 鼠王族 族長

レベル 298

HP 158000 / 158000

MP 0 / 0

筋力 93000

耐久 875000

俊敏 670500

魔力 0

スキル

・鉄壁 レベルS

・全属性耐性 レベルS

・集団統制 レベルS

・猛毒霧 レベル

・鼠王の威厳 レベルS

固有スキル

・変身 レベルS

・審判の牙 レベルS

称号

・鼠王族の長

・忠誠心

・聖鼠王

「こんな感じのレベルとスキルだった、圧倒的にキトラよりも強い、しかし」

ゼロ・ガルドラ 12歳 鬼虎族 魔術師・族長  
レベル 347

HP 147000 / 147000

MP 945000 / 945000 (+1000)

筋力 102000

耐久 55000

俊敏 897500

魔力 1200000

装備武器

・悪鬼王の小太刀

スキル

・経験値5倍

・空間魔力吸収 レベルS

- ・属性無効化 レベルS
  - ・魔力消費減少 レベルS
  - ・魔力容量増加 レベルS
  - ・再生 レベルS
- 固有スキル
- ・言語理解
  - ・アイテムボックス レベルS
  - ・サイレント レベルS
  - ・鑑定眼 レベル S
  - ・伝承 レベルS
  - ・魔術《雷》レベルS
  - ・魔術《光》 レベルS
  - ・魔術《炎》 レベルS
  - ・魔術《錬金術》 レベルS
  - ・魔術《回復術》 レベルS
  - ・断罪の剣 レベルS
- 称号

- ・ 転生者

- ・ 魔道を極めし者

- ・ 虎王族の長

- ・ 忠誠心

- ・ 魔虎王

勝負はほぼ一方的な状態に成った、弾幕のような俺の攻撃になす続べなくベニートは破れた

次の決闘は鳥王《バルドラ》VS猿王《セラト》

体長は約10メートル桁違いの火力と制空権を持つ鳥王族その姿は鳥と言うよりも蒼鱗を持つドラゴンだった

対する猿王セラトは深紅の背に掛けている二メートルは在るであろう深紅の大剣と巨大な盾を左手に着け軽々と振り回す力と体長七メートル程とは思えないほどのスピードで敵を切り刻む

バルドラ 157歳 鳥王族 族長

レベル 330

HP 100000 / 100000

MP 110000 / 110000



筋力 1 5 7 0 0 0

耐久 4 6 0 0 0 0

俊敏 6 9 0 0 0 0

魔力 9 9 8 0 0 0

スキル

・ 空間魔力吸収 レベル S

・ 魔力消費減少 レベル S

・ 魔力容量増加 レベル S

・ 魔術強化 レベル S

・ 魔術放出強化 レベル S

固有スキル

・ 魔術《雷》 レベル S

・ 魔術《光》 レベル S

・ 魔術《炎》 レベル S

・ 魔術《氷》 レベル S

・ 魔術《闇》 レベル S

・魔術《土》 レベルS

・魔術《水》 レベルS

・変身 レベルS

・終焉の咆哮 レベルS

称号

・鳥王族の長

・忠誠心

・魔竜王

そしてセラト

セラト 149歳 猿王族 族長

レベル 328

HP 980000 / 980000

MP 0 / 0

筋力 978000

耐久 440000

俊敏 990000

魔力0

装備武器

・猿王の聖魔劍

・猿王の聖魔盾

スキル

・身体強化 レベルS

・筋力強化 レベルS

・魔術耐性 レベルS

・麻痺耐性 レベルS

・幻覚耐性 レベルS

・絶対反射 レベルS

固有スキル

・変身 レベルS

・輪廻の劍

称号

・猿王族の長

・忠誠心

## ・聖猿王

この戦いは双方一歩も引かずに戦いは拮抗した

バルドラが変身して氷弾を吐けばセラトも変身して剣と盾で弾き飛ばす、しかし半刻程たったときそんな勝負に決着は着いた

「流石は薬師木の賢者と言われる種族、猿王族の長だ、私の攻撃をここまで防ぐとは、ならばこれも防いで見よ！」

バルドラはその蒼い双翼をはためかせて大空へと舞い上がった

「鳥王族に伝わる最強の技受けてみよ！《終焉の咆哮!!》」

「むう、そんなもの切り裂いてくれる我ら猿王族に斬れぬ物は無い喰らえ《輪廻の剣!!》」

バルドラの口から放たれた七色の光はセラトに向かう、セラトは盾を捨て両手で猿王の聖魔剣を握る、すると深紅の大剣はより鈍い光を放つ

バルドラの攻撃が当たると瞬間セラトは剣を降り下ろした

《《ドツツツゴオオオオオン!!!》》

凄まじい土煙と爆風に俺は錬金術でシエルターを作つて難を逃れた

ベニートは何事も無かつたように爆風を受けきつていた、本当にタフだな

土煙が晴れてきた、そこに現れたのは先程はなかった巨大なクレーターだった、その中心には二匹の巨大な獣が絡み合っている

「見事だ…流石は猿王族の長だ」

それは絡み合っていたのではなかった、セラトの首筋に噛み付くバルドラの姿だった  
セラトは意識を失っている様子だがその手には強く猿王の聖魔剣が握られバルドラの片方の翼を切り裂いていた

バルドラが口を放すとセラトはグラリと倒れた、急いで俺が二人の怪我を手当てした、魔術《回復術》は六年前に王都から逃げる途中に目覚めたスキルだ

手から回復の力を持つ光を放つ、これでほとんどの怪我は治る筈だ、俺はセラトの傷を全て治しバルドラの翼も繋げる

「これは…」

「うっ、我は…そうか負けたか」

セラトは意識を取り戻すと負けた事を思い出した、暫く何か考えていたが直ぐに身軽に立ち上がり

「良き決闘だった」

「お主も、久しく血が騒いだ」

双方とも固く拳を握り会うと何やら話始めた

「のお、虎の話があるんだが、ベニート殿も」

「我ら猿王族と鳥王族からの提案なのだが……この決闘で優勝したものに残り三種族が忠誠を誓うのはどうだろう」

突然の提案に俺が驚いていると

「ウム、私も賛成だ……まあいささかガルドラ殿の強さには驚かされたがここにいる長達もそれに引けを取らない力を持つ事が分かった

我々鼠王族はこの決闘の優勝者に未来永劫、忠誠を誓う事をここに宣言する」

「おう、鳥王族もこの身が朽ち果てようと永劫、忠誠を誓う」

「猿王族も同意だ、忠誠を誓う」

後は俺だけだが、はあく、そんなにチラチラこつち見んなよ分かったから……

「分かった、虎王族も賛同するこの決闘の優勝者に忠誠を誓う」

こうして誓いは立てられた、しかし少し違うのは忠誠を違うのはこの四人のうちの一人で一種族に忠誠を誓うのではないと言う事だ

残りの三種族は同盟と言う形でこれから助け合う事に成った。

「それでは我が契約用紙に使える木を持ってこようかの」

「それでは、我輩は墨でも持ってくるか」

セラトとベニートはそう言うのと決着を見ずに自分の森へと帰っていった

「どうするバルドラ殿、もう始めるか？」

「我は何時でも大丈夫だ、ガルドラ殿の調子が万全ならば」

「じゃあ、始めようか」

俺が駆けるとバルドラは俺に水弾を放ってきた、一発一発が1メートル程ある水弾を弾幕のように撃ちまくる、まさにバルドラの魔力は無尽蔵と言っても相違無いだろう

「レールガン!!!」

飛んでくる水弾の弾幕を光の段幕で打ち返す、しかし俺の足は止められてしまった

「《降り積もる水塊》!!!」

突如決闘場に影が射す、水弾を撃ち抜く合間に俺は空を見た

「おいおい、嘘だろ!!!」

決闘場を覆い尽くす程巨大な水の塊が突如として上空に詠唱され落ちてきている

「《獄炎の滝》!!!」

それを俺は地面から吹き出した炎で残らず溶かし尽くす、直ぐに訪れる魔力切れの連帯感、しかし直ぐ様魔力を回復しました

「フツフフ、見事だ」

それからは魔術の撃ち合いが始まった、多少魔力で勝る俺の攻撃は多少は当たるがバルドラの堅牢な鱗を破壊するばかりで致命傷は与えられずにいた

しかしバルドラの攻撃が当たる度に俺は体がバラバラに成るような痛みには耐えなければ成らなかつた、悪鬼王のローブの効果で魔術攻撃を70%カットしているとは思えない

「クウ！魔術はワシと同等か…いやガルドラ殿が少し上手、ならば！」  
バルドラは上空に舞い上がった、あの攻撃が来る…

「受けてみよ！《終焉の咆哮》!!!」

全属性の魔術を加えた七色の光線は真っ直ぐ俺めがけて突っ込んで来る

「耐えて見せる！《断罪の剣》!!!」

俺は悪鬼王の小太刀に魔力の流し終焉の咆哮を切り裂く、体が燃えるように熱い、死ぬかもしれない

熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い

パキッ！

突然、体を包んでいた熱さが無くなったそして七色の閃光を切り裂いた  
しかしそれで終わりでは無かつた、来た！

七色の閃光を盾に一気に接近してくる巨大なドラゴン、予想通りだ

「超大型魔術《クラウ・ソラス》」

その時上空が煌めき光に包まれた



《ドスッ！ドゴツツ！！》

空から高速で落ちてきた剣かは地面深くに突き刺さると同時に小さく爆発した、それでもそこには丸いクレーターが現れた

それがこの決闘場の上空にところ狭しとひしめき合っていた

「さあ防いでみろ」

ゼロがパチンと指を鳴らすと待機していた剣は一斉にバルドラ目掛けて降り注ぐ

「グオオオオオオオオオオ……！！！」

果てしない集中爆撃にバルドラはフラフラに成りながらも耐えた、しかしそれは最早満身創痍の体だったそれはそうだ、この技はロゼーノ王国がこの村に攻めてきたときに撃つ予定だった対軍団用の魔術、それを一身に浴びたら……

「あの、大丈夫ですか？」

「か、完敗……だ」

そう言ううとバルドラは地に倒れた直ぐ様、回復魔術を掛けて傷を修復した

そんなこんなしているとセラトとベニートが帰ってきた

「やはりガルドラ殿が勝ったか」

「じゃが見る限り楽な戦いでは無かったようだな」

俺はセラトが持ってきた薬師木の木の皮を錬金術で紙に変える、バルドラはベニート

が持つてきた桃源郷の桃を自分の鱗を砕いて蒼い墨に代えた

「では、ゼロ・ガルドラ様を我ら三種の王と定め如何なる時もこの身を盾にお守りする事を誓います」

「猿王族・族長セラト、誓います」

「鼠王族・族長ベニート、誓おう」

「鳥王族・族長バルドラ、勿論誓います」

「虎王族・族長ゼロ・ガルドラ、よろしく頼む」

それぞれの四枚の契約紙に一人一人判を押していく、各種族が一枚ずつ持つ事になり  
こうして四種族の問題は解決した

それから直ぐの事だった

《《《ガルドラ様!!》》》

突如バルドラ、セラト、ベニートが虎王族の村まで出向いてきたのだ、村は大慌てで戦だやらなんやらやっていたが直ぐに落ち着いて話を聞いた

「我々の忠誠心を見せるためにどうしたら良いか考えたのです、そこで我々の娘、息子をガルドラ様の元に置いて側近にして貰えないでしょうか」

俺は断つたが残りの三種族がどうしても変身されて土下座されたら断るに断れなかった、三種族は子供達を置いてニコニコと森へ帰っていった

子供達をどうやら俺の事を聞いていた用で尊敬の眼差しが凄かった

時は戻って今、俺ゼロ・ガルドラは夢だった旅に出ることにした、この大海原を自分の好きなように渡り歩く

俺がいない間は前ガルドラさん、今は名前を替えて《ジル》に村の事をお願いしている

またワシの孫との時間を奪うのかと怒られたが若いからそれも良いと渋々了解してくれた

他の三種族も流石はガルドラ様だとなぜか誉められ、俺が留守の間は全力で虎王族の村と千年花の森を守ると約束してくれた、そしていよいよ今日船出だ

「いよいよですな、ガルドラ様」

「世界にガルドラ様の名が轟くのですね、ううー」

「本当真に行ってしまうのですか…バルドラはバルドラはく!!!」

「ほれほれ、泣きなさんなバルドラ殿、我らが王の船出ですぞ、笑って送り出さんと」  
そんなことを言うセラトの目にも涙が浮かんでいた、息子達も親に別れの挨拶をして  
いた

やはりアイツは居ない

俺は少し間を見て王都へ駆けた、俺たちのもう一人の仲間《セリア》に会うために

## 船出と花見酒

「おい、セリア〜？」

王都の外れにある宿屋《モノノケ亭》このウェイターとして働いていたのがセリアだった

あのととき城から逃げるとき丁度配達に来ていたセリアはロゼーノ王国第一騎士団団長ミロ・カバロにいきなり牢屋の鍵と書状を渡され、俺たちを助けに来たと言っていた  
それから俺とカリーナはキトラのスキル《追跡者》によってセリアを探し出した、それから意気投合して森で会ったり王都で遊んだり…だがそれも一週間前、セリアは突如俺達の前から姿を消した

「居ない…か」

俺は元々セリアが住んでいた部屋に置き手紙を置いて、森へと帰った

「ガチャー！」

《今夜午前1時、千年花の河から出港する待つてる》

「…ゼロさん」

「…様そろそろお時間です」

「ギイー、ボタン！」

「ゼロにい…セリアねえはまだ来ないの？」

「シン君…」

鼠王ベニートの息子シン、まだ10歳に成ったばかりの少年だシンを撫でるのはキトラと鳥王バルドラの娘レーナ、父バルドラは蒼竜だったがレーナは16歳の雷竜だ

それをニコニコしながら眺めているのは猿王セラトの息子カエン、今年で17になる  
「主よ、私ともう一度王都を探して参ります」

「ご主人様、なら私が能力で王都を回ってきます！」

「いや、上空から私が探した方が広く見渡せるわ是非私に」

「人探しなら私の意分野よ、任せてゼロ」

皆それぞれ探し方を見つけ立候補してくれたが俺は任せなかった

「皆ありがとう、だがアイツが決めたことだそれに手紙も置いてきた、だから信じて待とう」

それから俺はバルドラに魔術《回復術》を伝承した、これで村の人が怪我してもバルドラが直せる筈だ、他の族長にもバルドラに怪我人が出たら助けを求めると言っておいた大丈夫だろう

そして深夜12時を過ぎた頃

「ム！」

「バルドラお主も感じたか」

「我也感じる」

「侵入者か、全く間の悪い…」

俺と族長達が知らない匂いが森に入ってきたのと同時に

「ご主人様、この匂いはセリアです！」

「だがセリアは族長達も知っているから侵入者には成らない筈だ…まさか」

《戦闘配置!!!》

「ベニート！女、子供を天空樹に避難させろ！鼠王族はそのまま天空樹を警護、バルドラ

！セラト！各種族の戦士を集めろ！虎王族の戦士も俺に続け！」

《《《承知しました王よ!!》》》

バルドラは直ぐ様変身し空へと炎を放つ、セラトも変身して胸を大きく鳴らした、ベニートは近くにいた側近に各村々に伝令を出し自分も虎王族へと駆けた

「人間の匂いだそれも一人や二人じゃない、鉄の臭いも混ざっている、軍隊だ」

間もなくして空から鳥王族が300名、森から猿王族320名と虎王族380名、総勢1000名一騎当千の戦士達が集まった

「皆の者よくぞ集まった、我らが王よりお言葉だ！」

バルドラが宣言すると辺りは静まり返った

「人間族が森に侵入してきたそれも軍隊でだ！」

俺の言葉にまたざわめきたつ

「感じている数だけで約八千人は居るだろう、何が目的かは分からない、だがもしこの森や森に住む民が目的だとしたら…戦わなくては成らない!!」

「だけど…勝てるか？」

猿王族の戦士が訪ねてきた

「貴様！それでも誇り高き猿王族か！」

「いや良い、確かに人間は数が多い…だからどうした？俺らは誇り高き種族！そのナワ



バリに入つてただで済むと思うな！

考えて見ろ我がが負けたらどうなる、我らは戦闘力が高い奴隷にされても良いのか嫁が息子が娘が家族が、我らは退けない退いてはいけない！行くぞ!!!我らの力を見せてやれ！」

《オオオオオオオ!!!》

何本もの火柱や雷が空に放たれ猿王族は胸を鳴らし虎王族は闇夜に吠えた

同時に俺達は駆けた、森の入り口に立つ目の前には全身を鎧に固めた兵士がひしめき合っていた、俺の後ろには今すぐにも戦闘を始めそうな様子の戦士達

「我こそは四種族の王、ゼロ・ガルドラここは我ら四種族の土地だ速やかに立ち去れ!!!」

俺が吠えると後ろの鳥王族は空に炎を吐き威圧する、すると前から歩いてくる一人の軍人

「これはこれは、私の名はミロ・カバロ、ロゼーノ王国第一騎士団団長の者だ、最初に言っておく我々に戦闘の意思はないだが、こちらに危害を加えるのであれば挑むところだ」

俺とカバロがにらみ会う、恐らく三秒もあれば首をへし折り殺す事が出来るとは思わが…

「退きなさいカバロ!!!」

この声は…聞きなれたあの

「こんにちは、ゼロ様」

「…セリア」

そこに居たのは最近居なくなっていたセリアだった

「控えろ！こちらのお方こそロゼーノ王国王女セリア・ロゼーノ様で在らせられるぞ」

「良いのです、ゼロ様少しお時間宜しいでしょうか」

俺はセリアを連れ森へと入った回りは戻ってきたベニートを加えた三族長が守ってくれていた

「あの日、突然王宮から使者の方が来て」

「王が亡くなられました、あなたが王位継承権第一位の姫です」

「そう言われてずっと王宮に居たの、たまたま《モノノケ亭》に寄らせてもらったら手紙が」

「そうだったのか…」

それから暫く俺とセリアはたわいのない話をしながら時間を過ごした

「ゼロ様、やっぱり私はこの国に残ります、残ってこの国から差別を無くします、私がここに来るっただけでこの軍隊ですよ…だから私この国に残って差別の無い国を作りま  
す!!!」

セリアは何時もと変わらない可愛らしい笑顔と銀髪が月の光に照らされ何時もよりも美しく感じた

「なら俺もお前の門出に贈り物だ…」

俺はセリアを抱き寄せその額に軽く口付けをした

「伝承で念話と言う能力を渡した、森に住むデンデンムシと言うカタツムリが持っていた力だ

俺の他にカリーナ・キトラ・シン・レーナ・カエン後は三族長のバルドラ・セラト・ベニートまで居る、相手を思い浮かべて話せ、会話ができる筈だ

《ゼロ様?》

《何だ?》

「うわ!スゴい…」

「何かあればここに連絡してこい、必ず助けに行く何処にでも何があっても」

セリアは顔を手で覆いながら後ろを向いた、暫くしてこちらを向くセリアの顔に迷いは無かった、他の仲間達とも別れを告げてセリアは人間側へ向かった

「じゃあ、この森を頼んだぞ」

《御意!!行つてらっしゃいませ!!》

「出港だー!!」

帆が後ろから風を受け船は進んだ、船は天空樹の枝を乾燥させ使っている、バルドラに

「大切なものだから是非私の守る天空樹で船を作って下され」

と言われありがたく頂いた、船のコーティングとして千年花の絞り汁を塗ってある、これで防腐作用があるからスゴいと思う

後は薬師木の枝が一本と桃源郷の桃が船に積んである、薬師木は砕いて粉にすればどんな怪我や病気も治る万能薬だ、桃源郷の桃も同様にその身をかじればたとえ骨が砕けたとしても一瞬で治るだろう

各部族が大切に守り抜いて来た物をこんなに分けてくれた、感謝しかないな

俺とカリーナ、キトラ・シン・カエン・レーナ、この六人で俺達はこの偉大なる海《グランドライン》を回る

「さあ皆！冒険の始まりだ！」

《おお！》

《ドドドン!!!》

「何だ！砲撃か！レーナ！」

出発して間も無くの事、突如海に爆音が響き渡る

「ゼロ様、隣の島が…」

「何だ？島が…桜の木のよう」

「ご主人様、花見酒等いかがですか？」

「あぁー、私も呑むーウシシ♪」

「な！私もご一緒します！」

「主よ、私も」

「俺も俺も」

「シン君はオレンジジュースね」

「ええ」

「シン、我慢しなさい」

「分かったゼロにい」

「ええ、では俺達の旅に祝して乾杯!!!」

《乾杯!!!》

「ゼロ様は私が命に代えてもお守りします！」

「もお、ご主人様は私が守るんです！」

「いや、私が！」

「いや、僕が！」

「ああ、もう分かった皆まとめて俺が守る！それで良いだろ？」

《《《《《全然良くない!!!》》》》》

「ウシシ♪楽しい旅に成りそうだね♪」

こうしてゼロ一行はグランドラインを進み始めた。

## 料理屋の変

ロゼーノ王国から船を出し始めて暫くたった頃、俺達は船での役割を決めた

「まあカリーナは航海士で決定だろ、他に出来る奴居ないし」

「ええ、この六年間色んな図書館に忍び込んで航海術を身につけて来たわ任せてウシシ

♪」

カリーナはドンと胸を叩いた

「後は狙撃手とコック、船大工、船長、副船長か？」

その瞬間、カリーナを除いた全員の色が変わった

「ゼロ様は船長だとして副船長はこの私レーナにお任せを」

「いやいや、副船長の座はこのカエンが全力で支えさせて頂きます」

「ええ、私がご主人様を支えるんです！」

「僕も副船長やりたーい!!!」

バチバチと火花を散らすそんな中に一人の女が核爆弾を落としたり

「なら戦って決めれば？ウシシ♪」

「か、カリーナさん？それは言っちゃあ……」

《上等だー！ー！！！！》

俺が止めたときにはもう遅かった、それぞれ変身を始め何時でも戦闘開始出来る体勢に整っている

「ああもう、分かったからちよつと待て！」

俺は船から手を出して錬金術を使用した

「錬金術《決闘場》この上でなら船も壊れないし床を壊しても問題ない、さあやるならやれ！」

そこに現れたのは海に浮かぶ巨大な決闘場だった、四匹の獣は船からそこに移るとゼ口の合図を待った

「相手を無力化するか海に緒としたら勝ちとする…始め！」

各自のスキルはこんな感じだ

キトラ 21歳 虎王族 守護獣

レベル 215

HP 86000 / 86000

MP 0 / 0



筋力 65000

耐久 42000

俊敏 945000

魔力 0

スキル

・ 虎王の威厳 レベル A

・ 集団戦術 レベル A

・ 追跡者（使用中） レベル S

・ 再生 レベル S

・ 属性無効化 レベル A

固有スキル

・ 断罪の剣 レベル A

・ 変化（使用中） レベル S

称号

・ 忠誠心（ゼロ・ガルドラ）

・ 魔虎

レーナ 16歳 鳥王族 守護獣  
 レベル 213

HP 78000 / 78000

MP 98000 / 98000

筋力 58000

耐久 61300

俊敏 65000

魔力 102000

スキル

・空間魔力吸収 レベルA

・魔力消費減少 レベルA

・魔力容量増加 レベルS

・魔術強化 レベルA

・魔術放出強化 レベルS

・属性無効化 レベルA

固有スキル

・魔術《雷》 レベルS

- ・魔術《光》 レベルA
- ・魔術《炎》 レベルA
- ・魔術《氷》 レベルS
- ・魔術《闇》 レベルA
- ・魔術《土》 レベルS
- ・魔術《水》 レベルc
- ・変身 レベルS
- ・終焉の咆哮 レベルA

称号

・忠誠心（ゼロ・ガルドラ）

・魔竜

シン 10歳 鼠王族

レベル 210

HP 102000 / 102000

MP 0 / 0

筋力 45000

耐久1000100

俊敏43000

魔力0

スキル

・鉄壁 レベルB

・全属性耐性 レベルA

・属性無効化 レベルS

・集団統制 レベルA

・猛毒霧 レベルB

・鼠王の威厳 レベルA

・発明 レベルS

・完全暗記 レベルS

・速読 レベルS

固有スキル

・変身 レベルS

・審判の牙 レベルA

称号

・ 忠誠心 (ゼロ・ガルドラ)

・ 聖鼠

・ 天才

カエン 17歳 猿王族

レベル 217

HP 69000 / 69000

MP 0 / 0

筋力 360000

耐久 710000

俊敏 470000

魔力 0

装備武具

・ 猿王族の黒剣

・ 猿王族の黒盾

スキル

・ 身体強化 レベル A

- ・筋力強化 レベルA
  - ・魔術耐性 レベルA
  - ・属性無効化 レベルA
  - ・麻痺耐性 レベルA
  - ・幻覚耐性 レベルA
  - ・絶対反射 レベルA
  - ・絶体味覚 レベルS
- 固有スキル
- ・変身 レベルS
  - ・輪廻の剣 レベルA
- 称号
- ・忠誠心（ゼロ・ガルドラ）
  - ・聖猿

ステータス的にはカエンが有力か：火力では流星は鳥王族だと言うべきか  
最初に攻撃を仕掛けたのはくあ、やっぱりシンか

「喰らえく審判の牙！」

シンが放った攻撃は真つ直ぐ三人の元へと飛んで行く

「あらあら、始めから奥の手を出すなんてねえ」

三人はひらりと避ける、同時にキトラに頭を叩かれレーナに尻尾で打たれ、最後にカエンに持ち上げられ海へと落とされた

直ぐにシンは船に帰ってきた、泣きながら

「うああーん、ゼロにいゝ、姉ちゃん達がゝ！」

「うん、最初つからあんな大技はダメだな」

「う、うん」

「ほら、また一人落ちそうだよ？」

そんなこんなやっている内に追い込まれていたのはカエンだった

あいつら二人で協力してやがる、流石にカエンも捌けていない

「お、お主ら…いささか卑怯ではないか！」

「えゝ？卑怯って何の事？」

「ご主人様の隣を勝ち取るためなら私はどんなことをしてでも勝ちます」

「ぬゝゝ、ぐああああー！」

激しい水しぶきを上げカエンが船へと戻ってきた

「恋する女は強いですな…」

「さあ、残るはあんただけよキトラ！」

「負けませんよレーナさん！」

虎と竜は一進一退の攻防を繰り返して広げた、レーナが撃ちまくった炎のせいでこの辺りの海水が蒸発して広い範囲でモヤのような物が掛かった

「まるでホットスポット見たいねウシシ♪」

そんなこんなで勝負は後半に差し掛かった

「これで終わりよキトラ！終焉の咆哮！」

キトラに七色の光線が向かう、その時キトラは

「ウワアアアア!!」

敢えて光線へと飛び込んだ、激しい爆発が発生し海はうねる…俺が辺りの蒸気を吹き

飛ばすと

「私の負けよ…悔しいいいー!!」

レーナの首に爪を立てたキトラの姿があった、しかし左手は跡形もなく消し飛んでいった

俺は急いでキトラの腕に桃源郷の桃を搾る、腕は直ぐに生えてきて元通りになった

「やり過ぎだ!!」

俺に怒られながらもキトラはニコニコと笑っていた、他の仲間は副船長の座を取れなかったのが悔しいのか暫くうつ向いていた



それから直ぐに役割を決めることにした、ここで恐ろしい才能を持つ者が現れた

「それじゃあ副船長はキトラ、他は〜」

「主よ、先程の決闘で舵が動かなく」

「何だと!」

「あ、それなら僕が直せるよ?」

シンが暫く舵をいじっていると、本当に直った

「鼠王族は手先が器用なんだ、後カリーナ姉ちゃんに付いてった時に船の事いっぱい調べたし、まあ船だけじゃ無いけどね」

「シン、お前は船大工に任命する、いやお願いします」

「はーい、頑張ります」

さて、これで残りコックと狙撃手か、これは決まりだな

「カエンがコックでレーナが狙撃手だな」

「は!承知しました」

「え、ええ〜何で私がコックじゃないんですか!!!」

レーナが叫んだ

「え、だつてお前昔、皆にお弁当作ってきたつて言つて皆で食べたらず揃つて腹壊したの忘れたのか?」

「うっ！うっ！分かりましたあ〜」

《主ありがとうございます》

《いや良いんだ、それより料理頼んだぞ？》

《お任せあれ！これでも私味覚には絶対の自信を持っています》

念話での会話を済ませた俺達は船を進めた、あゝあ蒸気で全然前見えない：

「カリーナ、今どこに向かつてるんだ？」

「ハイハイ、船長この船の進路は砂漠の国《アラバスタ王国》よ、先ずは港町の《ナノハナ》に行こうと思うけど良い？」

俺は船内を見ると先程の戦闘で皆腹が減っているようだ、先ずは腹ごしらえだな

「よし、行こう！」

俺達は船をナノハナの港へ止めた

「おい、この船はあんた達のか？」

呼び止めて来たのはこの港の責任者と名乗る男だった

「ええ、そうです何が？」

「いやいや、こんなに立派な船は久しぶりに見たからな、素材はなんだい？松や柏では無いよな…まさかグラウンドライン固有の木か？」

どうやら俺達の船に興味があるようだ、確かにこんなに立派な帆船は早々ないだろう

船の全長は約65メートルでメインカラーは深紅と黒、真ん中に黒いラインが入り、虎、竜、猿、鼠そして正面には鬼が彫られている、マストも二本、何より細部に施された宝石の数々

「いやあ、どつかの王族の方がいらしたのかと思つて焦つたぜ、何せ今この国はクーデターのまつただ中だからな」

何かヤバイ声が聞こえたが、どうせ長居はしないからいつか

俺達は皆で飯屋へ向かった、宝石がいつぱい埋め込まれている船を港において、まあ防犯は完璧なんだけどね

《ギヤアアアアア!!!》

あ、掛かった

あの宝石は一つ一つに赤目フクロウの認証魔術と攻撃魔術を込めてある超純粋な魔封石で俺達以外の人や招かれていない人が入るとたちまち攻撃するようになってい

「さ、飯に行くか?」

どうやら俺達はこの国ではそんなに目立たないようだ、俺はいつも通りローブを羽織つてはいるが頭の双角は見えている、レーナも人形になつても角があるしキトラとシン、カエンは尻尾が生えている

「まあ、目立たないなら悪いことではないな」

俺達は歩きながらどんな国なのかを調査しながら飯屋へと向かった

「ゼロにい、あそこが御飯屋さんみたいだよ！」

そう言うのとシンは駆け足で店屋へと突入した：速すぎる

シンの後に付いて店屋へと入る

シンは早速六人席を取ってこちらに手を振っている、軽く手を振り返し席に付く

「さあ、好きなものを頼め金は心配するなカーリーナが俺が作った宝石を売っていっぱい有るからな」

宝石をいくらでも作り出せる俺が居る限り、この船は金欠には陥らない

シンにカエンそして俺はサンドラ《大トカゲのステーキ（特大）》、キトラ、カーリーナ、レーナは《サンドラマレナマズのアクアパツア》

料理が届くまで、これからの事を話したりシンをからかったりと楽しく時間を過ごしていた

そして料理がテーブルに並んで食べようかと言うとき、突然店内が慌ただしくなった  
「店長と会話している途中で突然死んじまったらしい」

「こいつは旅の男だ：旅路で知らずに《砂漠のイチゴ》を口にしたんじゃねエかとみんな言ってるよ」

突然飯を食べてた男が死んだらしい、死んでしまったなら助けられないな…

俺達は食事を始め肉を口に入れた、その瞬間肉が口の中でゆつくりと溶けだす、ほのかに香るハーブの匂いと独特の香辛料が良いアクセントに成っている

「うん、美味しいな」

皆も美味しそうに食べている、その時また店内がざわつく、どうやら死んだと思っていた男が寝ていただけだったようだ、飯の最中寝られるとは相当疲れていたのか？

「ゼロにい！美味しいね！」

シンの屈託の無い笑顔に思わず顔がほころぶ、カーリーナが顔についた食べ残しをナプキンで拭き取る

お礼にシンから肉を一口貰っている、お返しにカーリーナも魚を分けている

《カーエン、覚えたか？》

《お任せ下され、完璧に覚えてございます》

《流石だな頼むぞ》

カーエンには積極的に食べ物を与える事にしよう、そして料理のレパートリーをどんどん増やしてもらわねば

そんなこんな話しているとまた誰か店屋に入ってくる、今度は店屋が静まり返った何やらさつき倒れた男と海軍？と言われる男が言い争っている様だ

「で？俺はどうすりゃいい…!!」

「大人しく捕まるんだな」

「却下、そりやゴメンだ」

にらみ合いが続いているが俺達には関係ない、飯を続けることにして食べ続ける……  
やっぱり旨いな

ん？何か雲行きが怪しいぞ、海軍の男がゆっくりと背中に刺青の入った男に近づいていく、構えた始める気か？

《ガシヤツ！ボコオオン》

突然店の扉が壊れ先程の海軍の男と海賊？見たいな男が壁を突き破り吹き飛んでいった……俺達のテーブルを巻き込んで

「ぜ、ゼロにいくまだ食べ終わって無かったのに……」

「おっさん、メシメシメシ！」

入り口を突き破りダイナミック入店をした男はナイフとフォークを鳴らしながらカウンター席に座った

その時、俺の周りから四つの凄まじい殺気が沸いた……むう俺でも勝てるか？

「私達の可愛いシン君を泣かせる奴は、何人たりとも許さない」

ユラリと立ち上がるキトラ・レーナ・カリーナ・カエン、ああダメだ多分アイツ死ぬ

わ

「お前らは座つてろ、俺が話つけてくるから」

俺は今にも変身しそうな三人と俺のあげた悪鬼王の小太刀を握るカリーナを椅子に座らせシンを慰めるように言った

「さあーて、俺の飯も吹き飛んだんだよな」

俺は一人でバクバク飯を頬張る麦わら帽子の男へと近付いた

「ちよつと良いかいお兄さん、あんたが入店したときうちらの座つてたテーブルひっくり返して飯が台無しなんだ、謝るだけで良いからウチの奴等に謝ってくれないか？」

俺がそう言うがその男は飯を食べる手を止めない

「おい、兄さ……」

「麦わら……!!!」

また今度はぶつ飛んで行った海兵が帰ってきた、そうかこいつは麦わらつて言うのか  
「あの、俺が先に話してたから海兵さんは少し待ってくれないか？」

「なにい？ガキは黙つてろ！てか麦わらは喰うの止めろ！」

海兵の言葉にやつと麦わらは料理を食べる手を止めた、そして料理を撒き散らしながら何かを叫ぶ

「野郎……!!!」

海兵にさんざん料理をぶつけると店の外に逃げ出した、海兵も後を追って出ていく

「なあオーナー、あいつらは？」

俺が料理店のオーナーに聞くと

「知らないのか？あの海賊は麦わらのルフィ懸賞金三千万ベリーの男だ、海兵の方は海軍の荒くれもの白獵のスモーカーどっちもヤベー奴等さ、そして何より」

「待てよルフィーー!!!」

さつき吹き飛んでいった海賊の方が今度はルフィを追い外へと走って行った

「あいつら、詫びの一つも入れていかなかったなあ〜」

「あの…ゼロ様？」

「ゼロにいい？」

「レーナあいつらの行方を探せ、カーリーナ少しここに残るぞ食料を買い込んでいてくれ、カエン、キトラ、シン一緒に来い」

《ハッ！》

「りよーかい、じゃあ先に船に戻ってるね」

「あの野郎、すっかり飯とシンの礼をしてやんねえーとな」

「ゼロにい怒ってるね」

「あんなに優しく話しかけたのに無視ですからね」

「あんな主は初めてだ」



《ゼロ様見つけました!》

レーナから発見の報告が届いた

「さあ、お礼参りで行こうか…!!!」

## 麦わらの一味

「くそ！炎上網とは！」

海軍が言い合っている声が炎の奥から聞こえてくる

「レーナ、炎が邪魔だ…吹き飛ばせ」

レーナは魔術《水》で炎を消した、目の前には山程海兵が待ち受けていた

「ええーと、確か《白獵のスモーカー》って言ったか？」

「てめえは、さっきの小僧じゃねえか？」

俺はゆつくりと歩を進めた、俺が一步進むと海兵達は身構えた

俺の横には黒髪の少女キトラと金髪の少年シン、赤髪の大男カエン、金髪の美女レー

ナ

「何だあ？テメエ等、さっきも言ったがガキは…」

「あなた…さつきから誰をガキ呼ばわりしてるんですか？」

「まさか、我等が主の事では有るまいな？」

「ええー、ゼロにいの事なの？それは腹立つな」

「あなた達、ご主人様とシン君を侮辱した罪重いですよ？」

「はあ？何言ってるんだテメエ等」

「お前らは他の海兵を頼んだ変身を許可する殺すなよ、こいつは俺がやる」

《ハッ！》

そう言うときトラ、レーナ、カエン、シンは自分の戦闘体勢に入った

その姿を見た海兵達はそれぞれ悲鳴をあげたり後退りしたりと明らかに逃げ腰だった

「テメエ何者だ!!!」

「名乗る必要はない、ただ俺達は謝って欲しいだけだ…」

スモーカーは腕を煙のようにしながら飛ばしてくる、俺はゆっくりと腰に手を回した

《ドンッ！》

俺の持つそれは重い音を立てスモーカーの右手を破壊した

「ぐああああー!!貴様、なぜ攻撃が当たる!」

ゼロの右手に持たれていたのは現代で言うところのデザートイーグル、その大口徑から立ち込める白い煙は直ぐに消えた

「カリーナから聞いたといて良かったよ、お前が能力者と言うやつか」

カリーナから聞いていた、この世の中には悪魔の实の能力者と言われる奴等が居る、中には攻撃が通じない能力者も居るといふ事

まあ俺はスキルに《属性無効化》が在るから特に問題は無いが能力者の能力を無効にする能力、バレルと何やら面倒らしいのでこれを錬金術で作り出した

「《鬼魔銃》、お前ら能力者の力を無効化する銃だ！」

俺の錬金術で魔封石とカリーナの持つていた海楼石を解析し組み合わせた弾丸をこの鈍い紫の光を放つ煌鉄鋼で作り出した鬼魔銃で打ち出す、銃の表面に彫られた鬼は魔力を込めると同時にうつすらと赤い光を放つ

固すぎるが故に加工出来なかつた煌鉄鋼も錬金術に掛かれば変幻自在、打ち出しは引き金を引くと持ち主の魔力を吸収し中で爆発を起こすその勢いで発射する

「クソがああああ!!!」

《ドドン!》

両足に魔楼弾を打ち込む、それでもこちらに左手に持ち代えた十手で攻撃してくるそれを一発目で十手を破壊、二発目で十手を持つ左腕を破壊した

「スモーカーさん! 貴様ああああ!」

若い女海兵が俺に向かって来る、無駄だな

「あなた達は私達が相手ですよ?」

キトラがその黒い巨体を揺らし立ち塞がる、しかし女海兵は歩を止めない

「そ」をどけえええ!!!」

飛び上がりキトラの頭を切り付けようとする、しかしキトラは素早く横へ回避し右手で女海兵を叩き落とした

フラフラに成りながらも立ち上がる女海兵に更に左手を薙ぎカエンへと吹き飛ばす、カエンはそれに回し蹴りを浴びせ更にレーナが尻尾で壁へと叩き付けた

「カツ…ハ！」

「たしぎい!!!」

力なく崩れ落ちる女海兵、そうかたしぎと言うのか上官を救おうとする心意気は立派だな

「ゼロ様、海兵隊殲滅いたしました」

レーナの声を受け後ろを向くと百人以上の海兵がそれぞれ倒れていた

「貴様あ、俺達に何をしようってんだ！」

「いやいや、何をしても俺はただお前に謝ってもらいに來たんだ、シンにな」

俺はシンを呼ぶと人化したシンがとことこ歩いてきた

「それだけのために海兵を全滅させたのか？」

「それだけ？」

「い、いや…分かった確かにあれは俺が悪かったすまん」

「すまんだけ？」

「うっ、す、すみませんでした」

スモーカーが深々と頭を下げるとシンはニコツと笑い

「いや、でも…」

シンは腕を振りかぶりスモーカーの下げる頭の前へ降り下ろした、そこには大きなクレーターが出来ていた

「次、ゼロにいをバカにしたり侮辱したら…殺すよ♪」

俺は船から桃源郷の桃を一つ持ってきて海兵に一滴ずつ飲ませた、流石にあのたしぎと言う女海兵にはけっこう飲ませたけど

そして海兵達は何故自分達の怪我が治ったのか不思議そうになっているが俺達を見て殆どの海兵は怯えていた

「ああ、たしぎって海兵はいるか？」

俺が声を張るとスモーカーの脇から一人こちらへ向かって来た

「何ですか、もう私達には用は無い筈です」

「あんだ、キトラを見て俺までたどり着けると思ったのか？」

俺の疑問だった、体格も明らかに違う相手にあんなに勇敢に立ち向かえるのか

「そんなの、仲間を助けるためなら理由は在りません！」

周りの海兵達が嬉しそうに照れていた

「そうか、なら俺達と一緒だな」

「お前の剣見せてくれないか？」

「え！ど、どうしましょう」

おずおずと刀を抜くたしぎ、俺は刀を受けとる刀身の波紋もしっかりとしている、手入れも行き届いている美しい刀だな、だが

「さつきキトラの攻撃を刀で受けたな、その時刃こぼれが起こっている」

俺は刀の鉋物、組織を解析して錬金術で再生させる、ついでにスモーカーの十手も

「さあ、これで治った筈だぞ」

「すごい、私を持つ前からあった刃こぼれも全部治ってる！」

「ああ、重さ重心ともに完璧だ」

「いや、たしぎには少しうちの仲間がやり過ぎたからな」

俺はお詫び代わりと言うことで海兵の武器を保全した、途中でカーリーナが来た

食料を買い込んだことだったのでこの国でゆくりしていく事にした、麦わらを探しながら

何か俺の銃を持つとうとしているケムリ男がいたが全然上がっていない

「がああああ！くそ！上がんねえ！」

俺が近くに行つて片手で軽く持ち上げる

「お前、力どうなってるんだ？」

「鍛え方が違うからね」

そんな事を言いながら俺達がこの場を去ろうとしたとき

「こいつらなら……なあ頼みがある」

突然スモーカーから呼び止められた、真剣な眼差しに俺は話だけ聞くことにした

「今この国でクーデターが起ころうとしているのは知ってるな？」

さつき店屋でお前の所の飯をひっくり返した張本人、あいつらの中にこの国の王女がいた、名前はネフェルタリ・ビビ、何であいつが一緒にいたのかとどこに向かうか調べてくれないか？」

「んー、まあ麦わらのルフィには会いに行くつもりだが」

「礼はする」

まあ特にやること無いしやっても良いか

「ああ、良いぜ連絡はこつちから誰か行かせる」

「すまん、頼んだ」

こうして俺達は何故か海軍と同盟を組んだ、一先ず麦わらのルフィアイツを探すか

俺達は船へ戻りあいつらの情報を探った、どうやらあいつらの船は隣の《エルマル》と言う町へ向かった様だ、しかし何故？カリーナに聞くとエルマルの町は暫く前に滅ん



で居る

その先にあるのは反乱軍の前の本拠地《ユバ》あいつらが向かってるのはそこか？

「スモーカーさん、何で彼等に？」

「たしぎ、お前、あいつらの異常な強さを見なかつたのか？あれは敵に回しちゃいけない生物だ、今のうちに貸しを作ってもパイプを作った方が得策だ」

そう言うのと海兵達はどこかへと消えた

「ご主人様、何故あの男の話を？」

「まあ暇潰しと、海軍に貸しを作っておくのも悪く無いと思ってな」

「よし、レーナは先に麦わらの一味を上空から探してくれ、見つけたら全員に念話で報告してくれ」

「了解しました、では！」

レーナが空へと舞い上がったあと俺達はキトラの《追跡者》で麦わらの一味を探す事にした

船をエルマルに停める、そこには干からびたオアシスと緑の町と呼ばれた町の姿を無くした廃墟があつた

俺達はここからは砂漠を歩く事にした、どうやら麦わらの一味は大分前に出発しているようだ、俺達は夜の食事を済ませ仮眠した後夜が明けるとき出発した

「カリーナはキトラに乗せて貰え、他の皆は変身して一気に抜けるぞー！」

カリーナはヒラリとキトラに股がる、キトラも乗りやすいように伏せていた  
全員の用意が整い走り始めた頃、レーナから連絡が入った

《麦わらの一味を見つけました、奴等はユバで仮眠を取っている様子です》

《ここから何時間かかる？》

《皆のスピードなら朝までには着くと思います》

《分かった、レーナもバレないように監視を続けてくれ》

《了解しました》

俺達はレーナから言われた場所へと駆けた、ユバに着く頃になるともう夜が明けた

《麦わらの一味が移動しました、いや、何やら揉めている様です、あ！王女様がルフィをボコボコにしています》

《何だそりやもう直ぐそこまで来ている、待ってて》

俺達の目線の先にはスモーカーの言っていた通り麦わらの一味が揃っていた

船長・モンキー・D・ルフィ、航海士・ナミ、船医・トニートニー・チョップ、コック・サンジ、狙撃手・ウソップ、戦闘員・ロロノア・ゾロそしてアラバスタ王国王女・ネフェルタリ・ビビ

カリーナは何故かナミに合わせる顔がないとユバに残った

俺達は麦わらの一味を驚かせないように少し離れたところで変身を解除して近づいた

「ん？何だお前ら？誰だ？」

「んおおお！何だあの絶世の美女は二人のビーナスが砂漠に舞い降りたあん!!!」

ぐるぐる眉毛の男がぐるぐる回りながらキトラとレーナに近付いて来た

「こんにちはセニョリータ、この砂漠の真ん中であなた達の様なこの世の奇跡に会えたことに感謝します」

サンジはキトラの手にキスをしようとしたとき

「あら、ありがとうございますでも私は全てご主人様だけの物ですからあんまり手とか触らないで頂けますか？」

「ハウー！」

「あー、私もゼロ様の物なんで」

「ゲホオー！」

血を吐きながら倒れるぐるぐる眉毛

「サンジー！誰か！医者あー！俺だあー！」

「何やってんだアイツ？」

一人コントしながらこちらに向かって来る毛むくじやらのタヌキ？それを見ながら首をかしげる三刀の剣士、あちらの女性陣はため息をついている

「キトラ、レーナ、下がってろ」

「はい、ゼロ様」

「はい、ご主人様」

二人はカエンの脇に下がった

「俺の名前はゼロ・ガルドラ、こいつらの船長をしている、今回はそちらの船長、モンキー・D・ルフィに用があつて来た」

「ちよつとちよつと、あんた行きなり来て何なのよ！ルフィが何したつて言うの！」

「俺達の食事を邪魔した、そして俺達の仲間を泣かせて謝りもしない、俺達は忠告した謝るなら許すと」

「え、ちよつとルフィ！あんたそんなことしたの！」

オレンジ色の髪をした女、あいつは多分ナミと言う奴だな

「ん、お前……誰だ？」

「それは謝らない意思表示ととって良いか？」

「何だ？やる気か！良し来い！」

アイツ、本当に謝る気が無いのか？謝ればそれで終わりにしようと思ったのに……仕方ない

「そちらが戦いを望むなら」

「ああ、そう来なくっちゃな！」

そう言つてルフィの前に現れたのは緑色の髪をした三刀のような、あいつはロロノア・ゾロ

「大将は最後に出るもんだぜルフィ、それにお前はクロコダイルとやらなくちやならねえんだ、雑魚の処理は任せな」

「ん、そうか、じゃー任せる！」

ゾロは刀を抜くとゆっくりと近づいてくる

「ご主人様、今回は如何しますか？」

「ん、やりたい人！」

俺が聞くと皆一斉に手を上げた、しかしいち早く手を上げた人がいた

「じゃあシン、行つてこい！」

シンはニコニコしながら立ち上がりゾロの方へと駆けていった

「ああ？ 邪魔だぞガキ！ 俺はお前んとこの船長に用があるんだ」

「ゼロにいにやって来て来て良いって言われたからお兄さん、倒すね」

「ああシン、変身無しでな！」

「ええー！」

そう言つて居る間にもゾロはシンの横を抜け俺に斬りかかつて来た

《キーン！》

しかしその刀は俺に当たる事は無かった、シンが一瞬で間に入り降り下ろされる刀を殴り防いだのだ

「だからお兄さんの相手は僕だつて！」

「おいおい…あのガキ今素手でゾロの刀を弾かなかつたか？」

鼻の長い男が叫ぶ、あれはウソツップだな

「何なんだテメエ！」

「僕の名前はシン、鼠王《ベニート》の一人息子にしてゼロにいの一の子分！」

「いや、自分と言うよりは弟感がスゴいけど…」

俺がボソツと呟くがシンは胸を張つてどや顔をかましている、いやいやキトラとレーナは軽くうるうるしている、何だ？ 参観日の母親目線かな？

「さあ行くよー！」

シンは拳を握り込みゾロの腹部へ一発、ゾロは横に避けて回避したがシンは左手で裏拳をゾロの顔へとみまっつた

ゾロは吹き飛び砂漠に転がる、直ぐ様起き上がり剣を構える

「鬼斬りー！」

三刀がシンの逃げ場を防ぐように三方から襲いかかってくる、しかしシンは避けない少し微笑みながら右手を前に出し

「麻毒槍…」

手のひらから出てきた金色の槍で刀を薙ぎ払う、同時にゾロの肩を突き刺した、槍を肩から抜いた瞬間ゾロは時折体を痙攣させながら地面へ倒れ込んだ

「ゾロ！お前ええー!!」

シンは槍を目の前でくるくる華麗に回すと構え直し

「そのお兄さん、死ぬことは無いけど暫く動けないと思うよ〜で、次は誰が相手？」  
「ウソ…でしょ、あのゾロが子供相手に負けるなんて」

「バカ剣士も油断をしていた訳じゃねえ、ナミさんどうやらうちの船長、クロコダイルの前にヤベエ怪物に目を付けられた様だぜ」

「早く〜、誰も来ないの〜？」

シンは槍をくるくる回して暇そうにしている、俺は立ち上がるとゆっくりとシンの前に出て声を上げた

「退け！お前達では我々には勝てない、無駄な戦いは望まない、何度も言っているが俺達は誠意を持って謝ってくればそれで良いんだ」

俺が叫ぶと彼方から何か声が聞こえてきた

「俺の仲間をやつて、何言つてんだぁー！！ゴムゴムのピストル！」

ん？ルフィあんなところからパンチを届くわけ…うお！

拳はゼロの頬をかすつた、あと少し左だったら直撃だったな

にしてもケムリの次は伸びる男か、本当に能力者つてのはめんどくさいな

「鑑定！」

モンキー・D・ルフィ 17歳 人間族 海賊

レベル 47

HP 5400 / 5400

MP 0 / 0

筋力 2300

耐久 4000



俊敏 3400

魔力 0

スキル

・大食らい レベル B

・打撃耐性 レベル A

・銃撃耐性 レベル A

固有スキル

・ゴムゴムの実

称号

・海賊王(仮)

・信頼

俺は鑑定を終えると頬の横にある腕を掴み引つ張る、ルフィは勢い良く俺の元へと吹き飛んで来る

「我流魔術《纏い》」

俺は足に炎の魔術を集中しルフィの顔を蹴り落とした、ルフィは激しい土煙を上げ砂

漠を転がる

同時にサンジが蹴りかかって来たが俺はローブを翻し腰に差してある《鬼魔銃》を足に三発撃ち込み怯んだ瞬間、弾丸を変更《雷弾》を肩へ撃った

「うがああああ!!」

着弾と同時に魔封石に込めた魔術《雷》が発動する弾丸だ、殺傷力は無いが相手を無力化するのにはこれ以上の物は無い

ルフィは鼻から大量の出血をしていながらサンジに駆け寄って揺さぶっている、既にサンジに意識は無い

「お前、何で俺に攻撃が効くんのだ！」

俺はスキル《属性無効化》が有るから能力者だろうが只の人間に過ぎない、しかしそれを言ってしまうって良いものか

俺は神から貰ったスキルだし、他の仲間も各種族にのみ表れるスキルだ

これでバレたら能力者を無効にする種族が居ると何処かの馬鹿共がロゼーノの森へ入ってくるかもしれない

ここは言わないで置くのが得策だろうな

「言う必要はない」

「ちよつとルフィ！落ち着きなさい！話を聞く限りあなたが悪いんじゃないの？あなた

もちゃんと話を聞かせて」

突然オレンジ色の髪をした女、ナミが俺とルフィの間に入ってきた

俺は何故怒っているのかナミに話す、途中からルフィも思い出してきた様で何故か頷いていた

「そう…分かったわちよつとルフィ！あんたが悪いんじゃないの！キッチンとゼロさんとシン君に謝りなさい！」

「おう！申し訳なかった！」

ルフィが頭を下げるとナミもルフィの頭を掴んで更に下げさせた

「ああ、分かってくれたら良いんだ、今度からゆつくりと入店してくれ」

「ゼロにいが許すなら僕も良いよ、ルフィさんっていっぱいご飯食べるんだね、僕ビックリした」

シンが驚いた様子を身振り手振りでもルフィとナミに教えていると突然ナミに抱きつけられたシンがいた、そうでしたよ家の子可愛いでしょ？

俺はゾロとサンジの怪我を治した、トナカイのチョッパーはどうやって治したのかしつこく聞いてきたがこの実もロゼーノ固有の木の实なので教えることは出来ない、チョッパーは悲しそうにしていたが代わりに俺が知っている毒消しの調合法を教えたらとつても喜んでいた

カエンはサンジと料理の話で盛り上がり過ぎていたがゾロがまたカエンに勝負を挑んでいる、怪我をさせるなどカエンに伝えておく

キトラとレーナはナミとビビに掴まり何か話している、キトラとレーナの顔がとても赤く染まっている一体何の話をしているんだ？

シンはルフィと何か話し込んでいたが暫くして各メンバーが集まってきた

「じゃあ何だ？お前たちはその王下七武海の一角であるサー・クロコダイルを倒そうと  
しているわけだ」

「おう！あのワニをぶっ飛ばしてビビを助ける」

麦わらの一味はそれぞれ頷いたり笑ったりしていた、覚悟は決まっているようだな

「そうか、助けは要るか？」

俺がそう訪ねると

《要らねえ！》

一味の総意の様だ、それから俺達は麦わらの一味を見送った、砂漠の煙に消えるまで

## 建國と画策

麦わらの一味を見送つて直ぐカエンにスモーカーへの伝言を頼んだ、カエンはこころよく胸を叩き変身し駆け出した

来るときはカリーナを乗せていたから本気で走れなかったがカエンが全力で走れば麦わらの一味より早く着くだろう、ついでに海兵達が乗れる砂ソリを錬金術で作った「いや、これは良い鍛練になりますな、お任せ下され必ずや麦わらの一味より早くレインベースへ海兵達をお連れします、では！」

キトラは瞬く間に姿が見えなくなつた、俺達は一先ずアルバーナへ向かうことにした、手助けは要らないと言われたがここまで話を聞いて黙つてる訳には行かないだらう話にあつたアルバーナへ向かつたカルーと言うカルガモが行き倒れて無いか確認だけしてあげよう

俺達はユバのカリーナを連れエルマルに船を取りに向かつた、ついでにユバの水脈に鉄の棒を突き刺し少し掘れば水が出るようにしておいた、けつこう深くまで砂で埋まつていたがこれで少しはルフィから聞いていたおじさんが助かると良いんだが

それから直ぐに海軍を乗せたソリを高速で引く深紅の5メートル程の猿が横を通過

していった、ルファイ達にバレない様に遠回りしているが早く着くだろう

船に戻るとサンドラ河を遡るため船の船首に取り付けてある二本の鎖をレーナの背中に繋げる、これでレーナがドラゴンに変身し船を引いて貰うと言う作戦だ、最初仲間を道具のように使うのは嫌だと言ったんだがレーナがどうしてもゼロ様の鎖に繋がりたいと言われたためお願いした

レーナは鎖に繋がる瞬間まで息が荒くて怖かった、今はしっかりと船を引いてくれているありがたい

「レーナ！ありがとうな！」

「ひゃうーい、いえそんな…全然です！」

レーナは金色の体を赤く染めながら更に走力を上げた、僅か一時間程でアルバーナへ着いた、俺達は隠れながら王宮へと侵入する

俺はサイレントを発動し侵入するが他の仲間は《擬態》を使っている

このスキルは俺が森の中にいたフカシナナフシを倒したとき《伝承》のスキルで奪って置いたものだ、こんなところで使うとは思わなかったがこれからは着けておくことにしよう

《ご主人様、前方に二名の兵士です如何しますか》

《私に任せて（暗盗術・抜鬼亜死）》

カリーナは悪鬼王の小太刀を抜き神速で二人の兵士の間を通り抜けた、二人は音もなく崩れ落ちる、ついでにシンが眠毒をあてまるで寝ているかのようになっている

《さあ行くぞ！》

俺はゆっくりと王の間への扉を開ける、薄暗い王の間にはレットカーペットが引かれその先には王座があつた、しかしそこに居るべき王の姿がない

いや、王だからと言つて王の間に居るとは限らないか……俺達が寝室に向かおうとしたときシンが何かに気付いた

《ゼロにい、王座の後ろ何かおかしくない？》

《ん？特におかしくは見えないが》

シンはゆっくりと王座の後ろに回り床を触る、そしてシンが床を軽く叩くとパラパラと音を立てながらまるで土竜の穴のような洞窟が現れた

《怪しくない？》

《怪しいな、行つてみるか》

シンを先頭にキトラ、レーナ、俺の順に洞窟に入る、カリーナは王座にコブラが戻つてくるかも知れないのでここで見張りだ、俺が光を飛ばしながら進めば洞窟は明るく成つた、狭い道を腹這いになりながら進むとやがて光が差し話し声が聞こえた

「本当にのろいね Mr. 4……のバカ！バ！バ！」

ああ、一番最悪の展開だな…あそこに縛られているのはネフェルタリ・コブラ、現アラバスタ王国国王じゃないか、んであれがサー・クロコダイル率いるB・W（バロックワークス）の殺し屋か

《如何しますかゼロ様》

《ああ、一度俺はスモーカーに伝えに行ってくる、レーナは上空からあの変な女とデカブツの監視、キトラは地上からシンは麦わらの一味を監視しだ、見つからない様に》

《ハッ！》

俺はスモーカーたちが居るであろうレインベースへ走った、途中念話が入ってきた何とロゼーノの獣王達からだった

《ガルドラ様、たった今人間族の王であるセリア殿が来て居るのですが何やら報告が在るようです、宜しいですか？》

《ああ、問題ない後城の建築はどうだ？》

俺は島を出る際に一つお願いしてきたことがあった、それが村を守るための城壁と砦そして城の作成だ

いかに一騎当千の獣王族と言えど守る範囲が多すぎと力が分散してしまう、そのために猿王族と鼠王族を中心に各聖地を守るよう城を作り始めたのだ



その各城を地下に掘った洞窟で繋げる、回りは煌鉄鋼で囲むため外からの侵入と浸水も防げる、城と城壁の為の材料は俺がいた内に作り出して置いた後は組み立てるだけ

城の外壁は世界一固い鋼鉄鋼と衝撃を吸収する吸振鋼を混ぜた合金《獣王鋼》、ただこの鉱物には大きな欠点があるそれは《とにかく重い》と言う事だ

一度俺が4メートル四方の獣王鋼を運ぼうとしたところ重すぎてギリギリ運べた位だった、しかし俺が島においてきた城壁は高さ30メートル幅7メートルの超巨大サイズだったのだ、それを4つの聖地を囲む様に作るため一つ当たり半径三キロ程の壁が必要に成るのだ

《はい、ガルドラ様の作り出された獣王鋼が重くはありましたが各種族が手を貸してくれ城壁は全ての聖地を囲み終わりました、ございます、城も先ず虎王族から製作し完成今バルドラ殿の城を作っております》

《そうか、ありがとう》

嘘だろ、あんなに重い鉱物を運ぶとか流石は獣王族だな、本心強い部下達だ

《いえいえ、ロゼーノ王国全種族ガルドラ様のお元氣な姿を見るのを楽しみにしております》

《あの、ゼロ様宜しいでしょうか》

その声は紛れもなくセリアの声だった

《久しぶりだなセリア、元気だったか？》

《はい、ゼロ様もお元気そうで》

《で、何の用だ？》

《あの、この度私セリア・ロゼーノはある法案を作りました、それが獣王国の独立法案です》

《ん？どういう事だ？》

《今回ロゼーノ王国の中にあるゼロ様の率いる獣王族の方々に王国を作って頂こうと思います、勿論今獣王族の方々が守っておられる聖域にですが》

《でも、そんなことしたらロゼーノ王国の領土が大幅に減るぞ？》

《そこでお願いです、私達は領土を差し出します、代わりにゼロ様方の力を貸して頂きたいのです、もし我々ロゼーノ王国に他の国が攻めてきたや海賊が攻めてきた時我々と戦いロゼーノを守って頂きたい》

《つまりロゼーノ王国の守護をしろと言うわけだな》

《はい、その通りです》

《どうする、確かに俺達の国が出来れば聖域を荒らされる心配は減るだろう、それにロゼーノ王国の人々との何か繋がりが出来るかも知れない》

《四王達はどう思う？》

《我々は賛成です、月毎に各種族の戦士を10人ほどロゼーノ周辺の警備をさせれば問題は無いかと》

《よし、ではそうするか》

俺は他の種族長から許可を得て決断した

《セリア、俺、ゼロ・ガルドラは獣王族の王としてその法案を認証する、ロゼーノ王国の守護は我々獣王族が請け負う》

《はい！ありがとうございます、ではこれから王国に戻り法案の認証を得たことを国民に伝えて参ります、建国の日などはゼロ様方の予定にお任せいたします》

《ああ、一つ良いかこれから俺らの国とロゼーノ王国は表向きは同盟国と言うことで良いのか？》

《はい、まだ世界政府に申請していないため国とはなりません但其のようになります》

《分かった、ありがとなセリア》

《いえ、私たちも大きな後ろ楯を得ましたこれからよろしく願います！》  
《ああ！》

念話を切りスモーカーの元へ走る、河を越え暫く走ると遠くに土煙が上がっているのが見えたあれは…カニ？

結構な速度で向かってくる巨大なカニ鑑定した結果《ヒッコシクラブ》と言うらしい

そのカニの上には見た顔が麦わらの一味だ、だがルフィは見えないどこに行っただい？

そうこうしている内にヒッコシクラブは直ぐ近くまで来た、俺は上空に火柱を上げ存在を知らせる

「ゼロさん！丁度良かった」

「ルフィはどうしたんだ？居ないようだが」

「ここに来る途中ビビがクロコダイルに掴まって身代わりに成るように…今クロコダイルと戦っているはず」

ナミがそう言うときビビは申し訳無きそうに項垂れている

「で？俺に何をして欲しいんだ？助けて欲しいのか？」

「え、良いの？」

ナミとビビそしてチョッパーはパツ！と俺の顔を覗き込んだしかしそれを止めるものが居た

「ダメだナミ、ビビ、チョッパー、ゼロあんたの力を疑う訳じゃねえ、確実に俺達よりは強いだろうあんな化物みたいな子供を部下に持っているんだ、しかもあれがあんたの船

の中で一番弱いつてんだから」

「そうだな、みんなルフィは何て言っていた？」

「ビビを王宮まで送り届けろと」

一味は静まり返った

「麦わらの一味は船長を信用できないのか？ルフィはみんなを信じてビビを託したんだ、一言も助けて何ては言っていない、なら俺は助けない皆も後ろを向くな船長の命令に従え、必ずビビを王宮へ送り届けろ」

俺がそう言うと言はれた、他の仲間も覚悟が決まった様だ俺はまた砂漠を駆けた、あつという間にヒツコシクラブは見えなくなったまたまた暫く走り続けると土煙が見えた

「今度は誰だ？」

よく見ると先頭に居るのはカエンじゃないか、その後ろの多くの土煙は海軍か

「主よおおお!!!」

全力で飛び付いてくるカエンにこれまた全力で飛び蹴りを喰らわせる俺、カエンは100メートル程吹き飛んで行った

「ゼロさん、え？スモーカーさんなら海に出ると言ってエルマルに向かいましたよ？」

たしぎにそう言われ俺とカエンはエルマルに向かうことにした、レインベースには寄

らずに砂漠を突っ切るコースに変更する

暇だからと走りながらカエンと演武をする事にしたカエンは大剣を俺目掛けて全力で降り下ろす、俺は鬼魔銃で防ぎ続けて大剣を絡めとるように鬼魔銃を回す、カエンはその回転に逆らわず同じ様に地面を蹴り着地する

更に大剣を高速で突き出す、俺は鬼魔銃で大剣の先端を撃ち抜き軌道を逸らし一気に間合いを詰め至近距離で腹部に三発雷弾を撃ち抜く

「ぬー、流石は主だ…だが鬼魔銃は我々にはやはり通用しないようだな」

カエンは大楯で防いでいた

「あくまで対人武器だしな、だが弾さえ代えれば殺れると思うがやってみるか？」

「い、いや…大丈夫です」

俺は近くに居るカエンの腕を掴み振り回す、全力で上空に投げ飛ばし俺はその上空に手をかざす

「合成魔術・光帝の槍」

一瞬間が光ったと思った瞬間カエンは地面に深々と埋まっていた

「オーイ、生きてるかー？」

俺が訪ねるとフラフラに為りながらも穴から出てくるカエン、その腹には大きな痣が付いていた

「いやはや、まだまだ見切れませんな」

今のは光魔術と錬金術を合わせた合成魔術、超上空に錬成した煌鉄鋼の槍に光魔術を付与し一気に地面へと打ち出したのだ、本当は地面に突き刺さる迄の技だがそれでは力エスが死ぬので地面に当たると直前攻撃を止めたのだ

「だが技の出は悪くなかったぞ、これからも修行だな」

そんなことを言いながら前を見ると土煙が見えた、今度こそスモーカーだ

「スモーカー!!!」

俺が叫ぶがビローアバイクの音が大きく聞こえて居ないようだ、俺は立ち止まり右手をスモーカーに向ける

「光魔術・光帝の終光」

半端じゃない威力の光線がスモーカーの脇を通り過ぎる、その光はどこまでも飛んでいった

「お、おおゼロじゃないか…いきなりは止めようぜ?」

「お前が止まらないのが悪い」

「何て理不尽な…」

「あの技はどう防ぐか、流石は主だ…」

俺はスモーカーに王宮での出来事を話す、スモーカーは頷き一言

「その件はたしきに一任している、あいつの考えに任せたい」

そう言うのと今向かっている所を聞いた、どうやらダンスパウダーの使用場所に目星が付いたらしい、海で仲間の海兵と落ち合う予定らしい

俺とカエンはスモーカーに着いていく事にした、スモーカーは反対したがカエンが睨むと手伝う事を条件に連れていってくれる事になった

「じゃあ走るか！」

俺が笑いながらスモーカーに言うと、二つ町離れてた筈なのに追い付いてきたお前達と走るってか？死ぬぞ？

カエンは片手にスモーカーをもう片手にピローアバイクを担ぎ俺と走り出した、スモーカーは煙になって逃げようと暴れたがカエンの属性無効化が発動し逃げる事が出来ず諦めた

全力で俺とカエンは走る、時々スモーカーの触れていない所が煙となつてちぎれたがまあ気にしない方向で

暫く走るとエルマルの港が見えた、そこには軍艦が5隻も停まっている、スモーカーは軽く震えながらカエンから降りて軍艦の前へ出た

「おいヒナー！」

スモーカーが軍艦に向かって叫ぶと一回り大きい軍艦の甲板から誰か出てきた、女？



「スモーカー君、ヒナを呼び出して置いてその呼び方は何？ヒナ心外」

結構スタイルが良い海兵だな、ただうちの女性陣よりは低いな

「その人は？見たところただ者ではない様だけど」

「ふむ、主よあの女見る目が有りますな」

「ヒナ、こいつはゼロ今回の作戦の助っ人として連れてきた」

するとヒナはヒラリと甲板から飛び降り俺達の前へと出てきた

「まあ、確かに強そうではあるわねでも…」

ヒナは俺の方へ近づいて来ると

「子供を戦場に出すと言うのはどうなんでしょ、ヒナ幻滅」

…ん？どういう事だ？

「あの？」

「大丈夫、君は何も心配しなくて良いわあの赤髪の大男がゼロね、如何に強かろうが何も出来ない子供を戦場に出す何て最低よ！」

「む？何故かは知らぬがここまで言われては引けぬ！」

カエンは腰の三メートルは有ろう大剣を抜き背中の大楯を左手に付けた

「そんな盗賊見たいな成りをして、子供に悪影響でしょ！」

「何を！ロゼーノ王国最強の獣、赤牙獣の毛皮で作ったこのローブを侮辱するか！」

「何よー！」

「何じゃー！」

こうしていきなり始まったヒナとカエンの戦闘、また波乱が有りそうだ…

## 瞬殺

《ああ、あ、ゼロに居ないと暇だねえ》

スキル・擬態を使い敵を追跡するシンとカリーナ、キトラ、空には見えないが恐らくレーナが大翼をはためかせていることだろう

《そんなこと言わないのよシン君、ご主人様は私たちを信じて任せてくれたんだもの》

《そうだけどさあー、僕もゼロに付いてけば良かったなあ》

その時シンは気付いて無かつた知らず知らずのうちに虎の尾を踏みつけた事を

《…私の方が、私の方が一緒に行きたかつたですよ！

こんな良く分からないおばちゃんとおジさん、変なしやべる犬を見張る位ならご主人様のお側で身の回りのお世話を全てこなし褒めて頂き、頭をナデナデしてもらつてそれから、それから…》

キトラは顔を赤く染めうつ向いた

《おーいキトラ、シン君が盛大に引いてるぞ》

レーナから忠告を受けキトラはハツとした

《いや、違うんですよシン君：私はただご主人様が心配で

別にご主人様に会えなくて寂しいなあとか

ご主人様の匂いがする方向へ走り出したいなあとかそう言う事じゃないから、ね？》

《うん、キトラねえがゼロにいの事が大好きなのは分かったから、でも今の念話って人数指定した？レーナねえにも聞こえてたみたいだけど》

《…あ》

《これはやらかしたなキトラ》

《あ、あの？ご主人様もしかして聞いていらつしやいますか？》

《ん、ああ…まあ少しな…》

《きやああああ!!!ち、違うんです、今のはなんと言うか誤解と言うか少しご主人様から離れて寂しかったというか》

《キトラねえ、ますます墓穴掘ってるよ？》

《最早深すぎて底が見えんな》

《キトラちゃんゼロ君の事大好きだねえ〜ウシシ♪》

《私も負けないよ…》

《あの、ご主人様？》

《ありがとなキトラ、俺もお前のような優秀な仲間がいてありがたいよ、あと…俺も

好きだぞ?》

《はう!…いきなりはズルいですご主人様》

《一応婚約してるんだからな、言っておかなくちやな》

《キトラだけズルい:ゼロ様私はその:婚約とかしていませんけど、私もつての駄目ですか?》

《勿論レーナの事も好きだぞ、ただ俺と婚約したいのかはしつかりと考えて決めてくれ》

《ええー、皆いきなりスタートしたねえ〜でもゼロ君と一番長い付き合いなのは私よ?ねえゼロ君?》

《まあカーリーナには苦勞させられたがな》

《え!じゃあ:私は嫌い?》

カーリーナが寂しそうに呟く

《そんなわけ無いだろう、一番長い付き合いのお前には一番苦勞を掛けている、好きだよカーリーナ》

《ウシシ♪素直で宜しい、私も大好きだよゼロ君♪》

いきなり皆からラブコールを掛けられ少し恥ずかしい俺は話を変えてこれからの連絡をした

《良いか、俺とカエンは海軍と一緒にダンスパウダーの降雨船を拿捕しに向かう

カリーナ、キトラ、レーナ、シンはこれから起こるであろう麦わらの一味とBWの戦いを監視、やられそうに成ったら直ぐ様援護に入れ》

《《《《《了解しました!!!》》》》》

連絡を入れ俺は足元を見た、そこにはフラフラのカエンが立っていた

まあカエンが熱くなっていたから俺がボコったんだが、てかカエンもボロボロなんだから念話に入って来なきや良いのに

「ああ、じゃあ改めて紹介する、この男がゼロ・ガルドラさんそしてその足元のが部下のカエンさんだ」

「ゼロ・ガルドラです、身長は確かに小さいですけど16歳です今回は降雨船拿捕の手伝いに来ました」

「私の名はカエン、我が主ゼロ・ガルドラ様の一の部下だ」

俺とカエンはヒナにそう言うヒナはこちらを向き敬礼した

「私はヒナ、海軍本部大佐よ今回は降雨船拿捕の協力感謝します」

互いに礼を交わすとヒナはスモーカーを連れて船室へ入った、間もなくして船は動き始めた

俺とカエンは砂嵐が巻き起こっている砂漠を眺めた

…船室…

「何だよヒナ、俺はゼロと話したいんだ邪魔すんな」

ヒナに腕を捕まれソファに投げたされるスモーカー

「何よその態度、ヒナ不満」

「で？何の用だ？」

スモーカーが訪ねるとヒナはニヤリと笑いながら

「あなたも大人になったのね、あんな子供にあなたが負ける訳が無いじゃない、子供に花を持たせる事ができるように成ったのねヒナ感動」

「…は？」

何を言っているんだこいつは、まさか俺が嘘を吐いてると思ってるのか？

「いや、恥ずかしがらなくても良いじゃない本当に強いのはあのカエンとか言う大男なんですよ、あいつも見たところ20歳頃に見えるけど」

「いやいや、本当にゼロに負けたんだよししかも本気にさせる事も出来なかった、恐らくあいつの仲間には一人も俺は勝てないかも知れないな…」

「あなた…そんなにあのゼロってこを海軍に入れたいの？あなたがそんなに押すなんて珍しいじゃない」

「いや、だから……まあ良い、直ぐに分かる」

…甲板…

《ゼロ様、セリアです》

《おお、どうだった？》

《はい、大臣達は森の守護者たちがこの国を守ると言うことで

国の警備費用が大幅に削減できると喜んでいました、少しは信用出来ないとの声も上がりましたが私が責任を持って説得しました》

《で、世界政府は？》

《国の建国には三つの条件があるとされました、一つ目が王、二つ目が国民が三万人以上、三つ目が三か国の承認》

《そうか、一つ目は大丈夫だが二つ目と三つ目が難しいな》

《はい、一国目はロゼーノ王国が承認しますが後二か国の承認が必要に成ります》

俺は暫く考える、そしてあることに目を付けた



《一か国は何とか成るかも知れないな：セリアは承認の準備を進めておいてくれ》

《分かりました、ロゼーノ王国としても同盟国を全力でサポートさせてもらいます》

俺はセリアとの念話を切るとカーリーナに繋いだ

《カーリーナ、ゼロだけどお願いしたいことがある》

《ん？私に出来ることなら良いよ？》

《敵の目を盗んでコブラと接触してくれ》

《ああ、そんなことなら楽勝よウシシ♪で？何て言えば良いの？》

《言うのはこうだ：》

…王宮前…

敵が王宮前に集合した事を確認するとカーリーナは崖の上に縛られているコブラの元へ向かい猿ぐつわを外した

「あなたがネフェルタリ・コブラね？」

「お、お主は？それよりも逃げよ、直ぐに奴等が戻ってくる」

「そんなわけには行かないのよね、私達の王から伝言を預かってきました、聞く気が有る

ならあなたとこの国は助ける事を約束しましょう」

「王だと？むう、伝言とやらを聞かせて貰おう」

「分かったわ、私の名はゼロ・ガルドラ、ロゼーノ王国から新しく獣人の国を作った者だ、単刀直入に言おう、我々は困っている

建国には三か国の承認が必要だがまだロゼーノ王国しか無い、なのでアラバスタ王国にも承認して貰えないかと思つて伝言を託した、もし承認してくれると言うのなら必ずこの国を救うことを約束しよう。以上よ」

「建国だと、うむ、新しき国が生まれるところは喜ばしく思う、一度お主の王の国を見てみたいものだな、だが何より今はこの国の終息が先決だ、約束しよう、この国を救えたならば必ずや建国に手助けする」

「契約成立ね、あなたが居ないことがバレたら奴等は計画を変更するかも知れない、暫くそのままだけど我慢してね」

《カリーナねえ、麦わらの一味来たよ？あれ？増えてる？》

カリーナはコブラを置き王国前に向かう、確かに増えてる

「各自別れてサポートしましょう、私はあのおばさんとハバットのおじさんで」

「じゃあ僕はあの変な化粧のお姉？お兄？わかんない人！」

「じゃあ私もシン君に付いてくは、教育に宜しくなさそうだし」

「んじや私はあのポーズとセクシーお姉さんで良い？」

キトラVSモグラ女&バット男

シン&カーリーナVSオカマ

レーナVSポーズ男&セクシーお姉さん

こんな感じに成った、極力麦わらの一味に任せるとしてやられそうになったら直ぐ様サ

ポート

「それじゃあ頑張ってください」

「じゃあねーキトラねえ、カーリーナねえ行こー！」

「ウシシ♪じゃ行ってくるね」

「んじや私も行きますか〜」

各自バラバラに散った麦わらの一味とそれを追うBWそれを更に追うキトラ、シン、

カーリーナ、レーナ

…キトラ…

「ああ、ここはサンジさんとチョッパー君か…何とか勝てそうですね」

私は安心しながら戦いの行方見守る事にする、しかし事態は急変した

「クエエエ!!」

「あれは！ウソツプとマツゲの乗っていた超カルガモじゃねえか」

「サンジ！あいつらナガハナが殺られそうだと言ってるぞ！」

「クソ！ウソツプか、チョッパ！すまないがここを一人でも大丈夫か？直ぐに戻る」

「うん、なるべく早く戻ってね」

そう言うときサンジは超カルガモに乗り走り出したのだ、さてヤバイな

《シン君、カリーナさん、そっちのウソツプさんが殺られそうだと聞いたんですが》

キトラが念話すると

《うん、あのオカマって人にボコボコにされてたよ…あ！今度はラクダがやられた、

これって助けに入って良いのかな？》

《そうですね、やられそうに成ったら直ぐ様援護に入れとの事でしたから大丈夫で

しょう…まあやられましたけど》

《ウシシ♪了々解！》

やれやれ、やり過ぎなければ良いけど…

…シン＆カリーナ…

「んもおく、じよーだんじやなーいわよー!!! 何で王女様居ないのよ、他の人の獲物を横取りする訳に行かないし、手柄は諦めて皆が帰ってくるのを待つしかないわねえー」

「じゃあ僕と遊ぼうよ」

「ん? だーれよおー!」

オカマが振り向くとサラサラの金髪をなびかせながら立つ美少年がいた、年齢は10歳程で身長140センチほど服装は白いシャツに黒のベストと黒の長ズボン

「僕の名はシン、ゼロ・ガルドラ様に仕える従者だ!」

「あらく、可愛い坊や…たーべちやいたい」

「あんまりうちのシン君に近づかないでくれる? ほら、シン君も下がって」

そう言いながら出たのはカリーナ、紫色の長髪を一つに結び腰には悪鬼王の小太刀を携えている、服装は茶色のショートパンツに胸元の大きく開いたTシャツを着ている

「ええー、僕やつちやダメなの?」

「シン君、世の中には戦つちやダメな人種もいるのよ、あれはダメなやつ」

「ちよつと! 何かとーつても失礼な事言われてる気がするんだーけど!」

「うん、じゃあ久しぶりにカリーナねえの戦いを見るよ」

ウソツップとラクダを連れシンは近くの家の玄関口に座り込んだ

「ウシシ♪それじゃあシン君も見てる事だし情けないお姉さんの姿は見せられないわね」

「何でもいーわ、早く掛かって来いや小娘が！」

カリーナは腰の小太刀にてを伸ばすと、トットトツとゆつくり歩き出す

同時にオカマが走り出し真っ直ぐカリーナに向かつてくる後三メートル、二メートル、まだ動かない後一メートル、オカマが手を突き出す、その時

「暗盗術・忍亜死」

隣を通りすぎるオカマは何があつたのかさっぱり分からない様子だ、カリーナがゆつくりと振り返りオカマに近付く

「遅すぎるよ」

カリーナが指を鳴らす、同時にオカマの服は所々破け地に伏した

「化け…物ねい…かはっ！」

戦いが終わるとシンがとことこ近付いて来た

「流石は戦闘ランキング2位のカリーナねえだね！僕18発までは見えたよ！」

そう、ゼロの船で一番の戦闘力を持つのは勿論ゼロ・ガルドラだ、しかし2番目の力

を持つのはキトラではなくカーリーナだったのだ

「ウシシ♪残念25発だよ、まだまだだねシン君」

「大丈夫か！ウソツプ！マツゲ！」

「あ、ヤバイあれはサンジさんだ逃げるよシン君！」

「うん！」

ここうしてシン&カーリーナVSオカマ勝者…シン&カーリーナ！

## 決着

「ウソツプしつかりしろ！」

そう言つてウソツプを抱き起こすサンジ、ウソツプはハッキリした口調でこう言つた  
「勝負は一秒で着いた！」

「ヴォッ！」

寝ていた筈のラクダと共にグーサインを出すウソツプ、しかし辺りはそんな明るい雰  
囲気ではなかつた

壊された壁、えぐられたような地面そしてその地面に伏しているM r. 2 ボンクレー  
「で、何があつたんだウソツプ」

「ああ、俺もよく分かんないんだあまりに一瞬の事で……」

「あ？」

「俺とマツゲがM r. 2 にやられて倒れた後直ぐにあのシンつて言う子供が現れたん  
だ」

「ああ？シン君が？何でだ？」

「それからシン君がM r. 2 と戦う雰囲気になつたと思つたら今度は紫色の髪をした美



女が現れMr. 2を一瞬で倒してしまつたんだ」

「え！美女だつたのか……」

「いやそこじゃねえだろ！まあ何となく話を聞くとその美女もゼロさんの仲間見てえだつたぞ、それにあのシンって子供より何かあの美女の方が強いらしいし……」

「いよいよ化け物だな、あんなのが何人もいるなんて」

「本当に何者何だ？」

「それよりチョッパーを置いてきたんだ、急いで戻るぞウソップ！」

急ぎ先程通つて来た道に戻るウソップとサンジ、行き先はチョッパーの援護か

《キトラねえ、そっちはどう？》

《ええ、こちらもう少して片付きます》

……キトラ……

「大丈夫ですか、チョッパー君」

Mr. 4、ミス・メリークリスマスの完璧なるチームワークそして愛犬ラッスーによる時限爆弾攻撃、なすすべ無く吹き飛ばされ敗北を覚悟したチョッパーの前に一人の女性<sup>が</sup>立ちふさがつた

「あなたは…キトラさん」

身長約160cm、艶めかしい黒髪ショートを砂漠の乾いた風になびかせチョツパーの前に立ちふさがる、黒で統一されたメイド服は何か怪しげな雰囲気をかもし出す

あまり身長も高くないキトラ、普通なら何も安心出来ないだろう、しかしキトラが来たことでチョツパーは完全なる勝利を確信しその意識を闇へと落とした

「お疲れさまでした、後は任せて休んでください」

倒れる勇ましいトナカイの頭を優しく撫で口にポケットから取り出した瓶の液体の3滴程含ませる、チョツパーは安らかな顔をした

「ちよつとあんた!どこの誰だか知らないけどそのトナカイは私達の獲物だよ!」

「かあ~~~~ええ~~~~せえ~~~~」

ギヤアギヤア騒ぐモグラとデブを向きキトラは丁寧を受け答えた

「お初にお目にかかります、私ゼロ・ガルドラ様に仕えるメイド、キトラと申しますこの度は主ゼロ様の命によりあなた達を…排除します♪」

最後を女神のような笑みで締め括るとゆつくりと二人と一匹に近付いて行く

「ハッ!あんたみたいなお嬢に何が出来ると言うんだいこのバカ!バツ!バ!」

「い~~~~く~~~~ぞお~~~~」

ラツスーがくしゃみと同時に時限爆弾を発射したそれをMr. 4がキトラ目掛けて

打ち込んだ

しかしその弾はキトラに届く事は無い、自分目掛けて飛んでくる弾にキトラを向かっていく

自分の軌道上で時限爆弾を掴むとその走りの勢いを殺さず持ったまま高速でMr. 4へ接近右足でバットを蹴り飛ばし勢いそのままMr. 4の左頬へ左回し蹴りを叩き込む

遺跡を破壊しながら吹き飛ぶMr. 4目掛けて右手に持つ時限爆弾を軽く投げつける

爆弾はいとも容易くMr. 4に追い付き激しい爆発を引き起こした

パラパラと空から舞い落ちる遺跡の残骸と共にゆっくりとミス・メリークリスマスに歩を進める

「は……え？み……Mr. 4？何が、何が起きたんだい!!!」

「さあ、次はあなたですよ」

コイツはヤバすぎる、ミス・メリークリスマスの殺し屋としての経験が全力で警告を知らせる、今すぐこの場所から逃げなければ、間違いなく……殺される

「ひいー」

穴を掘り地下へと潜るミス・メリークリスマスしかしキトラはけして逃がさなかった

「…振虎」

キトラが地面へと右手を叩く、その時キトラが叩いた地面を中心に砂煙が波紋のよう  
に波打った

「ギャアアー……!!」

その波に打ち上げられた哀れなモグラは地面にたどり着く前に虎の黒き爪に意識を  
刈り取られた

「さあ、あなたの主人は敗れましたあなたは どうしますか?」

キトラはスキル、虎王の威厳を発動するラッサーは怯えガタガタ震えながら体を伏せ  
た、服従の印だ

「宜しい、私たちと来なさい」

「ワフッ!」

こうしてキトラはラッサーを掴みシン、カーリーナの元へと向かった

「わあああ~~~~キトラねえ、そのワンちゃんは何々!!」

「敵の仲間だったのですが私達に服従の印を示したので連れてきました」

シンが頭や背中を撫でる、そこで先程 M r. 4 とミス・メリークリスマスが話してい

た事を教えた

「え！銃に悪魔の実を食べさせたの？」

キトラの話聞いてシンが考え込む

《ゼロに聞いてみる？》

《ああ、聞こえるぞどうした？》

《僕このワンちゃん飼いたいんだけどダメかな？》

《うーん、命を預かってるその意識を忘れずに世話するなら良いだろう》

《やったあぁー!!!》

《こっちもほとんど片付いたから今からカエンと向かう》

そう言うときゼロは念話を切った

…ゼロ…

「な、何者なのあの子」

先程降雨船を見つけ戦闘配置に着いたヒナの黒檻部隊しかしその部隊が活躍する機

会は無かった

「光魔術・光帝の弓」

ゼロが右手を空にかざす、同時に空から数多の光矢が降り注ぐ矢は敵だけを貫き物の三秒で蹴りは着いた

「流石の魔力操作ですな主よ！」

「じゃあさっさと帰るか」

「俺達って必要だったか？」

何故かスモーカーの部隊の海兵達は当たり前といった顔をしていた

「ちよつと君、今何したの！」

ヒナが全力で突っ込んでくる、しかし俺の後ろで控えていたカエンがその進行を妨げる

「攻撃手段は問わないという約束だったよなスモーカー」

「ああゼロ、その通りだ」

「ちよつと、何が何だか…ヒナ混乱」

「無駄な詮索はするな、この私でもこれくらいの戦力ごときものの5分で片付くわ」

「そう言う事なんで帰りましょ」

ゼロがそう言うのと船は降雨船を拿捕した



「主よ、私が見る限りあのサングラスの男と鉄の拳を持つ男の乗る二隻かと」

「こ、攻撃中止!!今すぐ攻撃を止めなさい!」

ヒナの声が聞こえていないのか攻撃を止めない二隻の船

「このデカトカゲめ、俺たちのヒナ嬢には指一本触れさせないぜ!」

痛くも痒くもないが少しイライラし始めたレーナ、しかしレーナがキレルより先にゼ

ロがキレた

「爆発魔術・雷帝の紅爪」

空から雷を纏った炎が五本爪のように二隻の船を抉り取る同時にとてつもない爆発を引き起こした

「な、何て事を…」

二人はギリギリの所で船から飛び下り難を逃れた様だが船は跡形もなく消し飛んだ

「動くな!」

「何のつもりだ?」

ヒナを始めとする乗組員が一斉にゼロへ銃を向ける

「いい、一体何をした!」

「おい!ヒナ止めろ!」

「お前らが俺の仲間を攻撃したから俺も攻撃したただけだが?」



「そんな、何をしたか分かってるの！あなたは今海軍の船を二隻潰したのよ！」

「それが？」

「もういい！大人しくしなさい！」

ヒナがゼロを捕らえようとするとかエンが前に塞がる、ヒナは気にせず先にカエンから捕らえようとオリオリの力で通り抜ける

「これで一人め確保よ」

「ム？何だこれは…バキン…柔いな」

「そんな…バカな…」

「邪魔をするな海軍、次は全滅させるでは俺達はこれで」

レーナの背へゼロ、カエンが乗るとレーナはその大翼を羽ばたき大空へ飛び去った

「な、何だったの？」

「奴等は絶対に敵対してはいけない、どう本部へ報告する？」

「そんなことヒナに聞かれても…」

「ゼロ様…私のために私なら全然大丈夫ですのに」

「ん？いいや、俺達は仲間を傷つけるやつを決して許さない、勿論我々の種族もな」

「ゼロ様……あ、見えてきましたよ」

「あくあ、やつぱりぶつかったか」

下にはぶつかり合う反乱軍が見えた、と同時に空へと飛び上がるファルコンが見えた、その手には巨大な爆弾が見える、しかしそれを持つファルコンの顔に恐怖や後悔等の表情はなく自分の役割を果たせたという安心の表情そして微かに笑みを浮かべていた

俺はこの男を殺してはこの国の大きな損失だと感じた

「レーナ！ 奴を死なせるな！」

「お任せください!!!」

俺とカエンが背から飛び下りるとレーナは全速力を出した、光速で近づいた

「私に任せてください」

「君は……」

ペルから半ば強引に剥ぎ取った爆弾を掴み全力で空へと放り投げる

そしてその大翼を命一杯広げペルを包む様に覆い被さる、その瞬間空高くで爆発し襲ってくる衝撃と熱波、あまりの衝撃に地面に叩き付けられたレーナ、しかしペルにダメージが伝わらない様に体を盾に守り抜いた

「ううう、痛ーいー！」

レーナは人に戻りペルを揺さぶる、うん大丈夫そうだ気を失ってはいるが特に大きな怪我は無さそうだ

「レーナ、大丈夫か？すまないあんな事をお願いして」

謝るゼロにレーナは一言

「じゃあ今度二人つきりでデートしてくれたら許します」

「ああ勿論、全力でエスコートさせて貰うよ」

そして俺はこの無駄な戦争を止めさせるため空に手をかざした

「俺の全魔力を持っていけ！水魔術・水帝の祝福」

レーナから借りた水魔術で空から雨を降らせた、次第に王国から狂気が減っていく、

戦争は終わる

「ご主人様く!!!」

「ゼロにいく!!!」

「ゼロ君く!!!」

俺の仲間も揃ったし……じゃあ約束を果たしに行こうか!!!

## 交渉と分かれ目

「ねえねえゼロ君、どのドレスが良いかな？」

そう言うとかリーナは胸元と背中が大きく開いた黒のドレスで部屋から出てきた

「わあ、カリーナねえ綺麗〜!!!」

シンはそう言うのと黒のタキシードに身を包みパチパチと手を鳴らす

「ありがとうシン君、でもあの二人も相当だよ…」

カリーナの視線の先には薄桃色のドレスに身を包むキトラと深紅のドレスに身を包むリーナがいた

「あれ？まだゼロ様着替え終わらないの？」

待ちきれないのかリーナがそわそわし始めた、その時ゼロの更衣室の戸が開いた、そして全員が言葉を失った

「待たせたな…何だ？」

頭から生える双角と深紅の瞳、黒髪を軽く後ろに流し体を黒一色のスーツに身を包んだ

「か…カッコいいです〜〜♪」

女子軍は何やらキャアキャア叫んでいるが俺の後ろに控える大男も黒のタキシードに身を包んでいる

「主よそろそろ」

カエンから急かさされ俺達は部屋を出た、長い廊下を歩くと突き当たりの部屋に通された、案内してくれた若い女性に笑顔で感謝すると顔を赤くして足早に去っていった

目の前には堂々とした荘厳にして豪華絢爛な扉があった、俺達はその扉の前で一度落ち着き頷きあった

「さあ、行こうか」

ゼロが扉に手を掛け扉を開けた、目の前には応接室のような雰囲気での部屋の本真中には長方形の机、そして向かい合う様に三人がけのソファが置いてある、その奥にはこれまた豪華な机と椅子が一組置いてある

そして俺が扉を開けるとその椅子に座っていた髭を生やした男が立ち上がりこちらへ向かってくる

その後ろにはあの護衛隊副官《ペル》《チャカ》そして護衛隊長《イガラム》の姿があった

「ようこそいらした、獣人族の王よ私はここアラバスタ王国国王《ネフェルタリ・コブラ》だ」

「同じくアラバスタ王国護衛隊副官ペル」

「同じくアラバスタ王国護衛隊副官チャカ」

「そして私がアラバスタ王国護衛隊長イガラムです」

「失礼だがそちらのお名前もお聞かせ願えるか？」

コブラからの申し出にカエンが応じた

「獣神王国《ガルドラ》親衛隊カエン」

「同じく親衛隊シン」

「同じく親衛隊レーナ」

「親衛隊副官キトラ」

「親衛隊隊長カーリーナ」

「私が獣神王国《ガルドラ》初代国王、虎王ゼロ・ガルドラだ」

獣神王国《ガルドラ》新しい王国の名前だ、事前に四王達には報告しこの契約が締結し次第一度王国に帰る手はずになっている

四王達はそれぞれ知り合いの獣族に声を掛けると《バルドラ》にお願いし各島々に連絡を送っているらしい

「おお！貴殿がゼロ・ガルドラ殿か、話はカーリーナ殿から聞きました、約束通り我らアラバスタ王国は獣神王国の建国を承認致します」

「それはありがたい、それともう一つ提案があるのですが宜しいか？」

「おお、是非お聞かせ願いたい」

「我ら獣神王国はアラバスタ王国と同盟を結びたいと考えています」

その時コブラの目付きが変わった

「フム、同盟か…して我々にはどんな利益があるのか？」

「はい、我が国と同盟を結ぶならアラバスタ王国に降りかかる火の粉を全て打ち砕いて見せよう、それによりアラバスタ王国はどこからも脅かされない国になる」

しかしこの意見に反論する男がいた

「ゼロ殿！それでは我が国が国を守れないと申すのか！」

「我々は数百年この国を守り続けてきた、それが昨日今日出来たばかりの新国に！」

「…何か間違えたことを言ったか？実際に守れていないではないか？」

ペルとチャカは顔を赤くしてゼロに向かつてくる、しかしレーナとカエンがその行く手を阻む

「そこを退け！」

「良いんだな？」

カエンが静かに言った

「もしここで我が主に危害を加えた場合を考えろと言っているんだ」

「私はそんなことも考えられない人を助けたの？」

「何を言うか！ここは我らアラバスタ王国の地ここでお主らがいくら暴れたとしてもこちらには軍隊が有る！」

「…だからどうした？」

ゼロの氷のような冷たい瞳を見たペルはそれ以上言葉を発する事は出来なくなつた  
ペルの動物的勘がこれ以上は駄目と警告している

「コブラ王よ、正直に言うこのアラバスタ王国は自分で国を守るほど強い軍隊は持っていない、私が一度国に帰りこの国を滅ぼすとしたら戦士を千名連れてこれば容易いだろう」

その時コブラの顔が曇る

「千名だけでこのアラバスタ王国を滅ぼせると？」

「ああ」

「その根拠は？」

「…まあこれが根拠になるかと言われたら不思議ではあるが、どこか空き地は有るか？  
誰も来ないような」

俺達はコブラ達に連れられ王都の外れに来た

「ではこれから見ることは他言無用で頼む」



そう言う俺はキトラ達親衛隊に合図を送る

するとカエンは瞬く間に口から大きな牙を生やした赤毛の猿にそして続けてレーナが黄金に輝くドラゴンにシンが体からバチバチと光を放つ巨鼠そしてキトラが漆黒と紅蓮の体毛の虎に

「な、何と……これは」

「これが我が国の国民達だ、こいつら以外の国民もここまでではないがそちらの国のペルやチャカ、イガラム位なら三対二でも勝てるだろう」

「う……むう勝てるか、ペル、チャカ、イガラム」

「わ、私は……」

黙り込む三人そんな沈黙を破ったのは国王コブラだった

「わかった、こちらとしても国防の力が増えるのはありがたい、同盟を組ませて頂く……して我々が貴国に払う対価は何を？」

俺達は一度また部屋へ戻り話始めた

「我々はアラバスタ王国から特産でもある発光岩を年千トン送ってくれ、見返りとして我々から毎月10名の戦士を派遣する配置などは任せる各町の治安維持に使用してくれ」

「それだけで良いのか？ 言つては悪いが発光岩は確かに特産では有るが衝撃を与えると

少し光るだけで何にも成らない石だが？」

「そう思うなら少し色を付けて送ってくれそれだけで此方は十分だ」

俺達は固く握手を交わすと部屋を後にしようとして扉に手を掛ける

その時突然扉が開いた

「お父様！あ、ゼロさんいらつしやったんですね失礼しました…カツコいい」

「これはビビ王女、今帰るところだから大丈夫だよ」

「えー！何で帰るんですか！今ルフィさんが目を覚ましたんです直ぐに夕食に成るので一緒にダメですか？」

「う、うゝむ」

俺は後ろを見るとキラキラ目を輝かせている金髪の少年がいた

「ねえねえゼロにい、ご飯…食べちゃダメ？」

ああダメだ可愛すぎる家の子、カーリーナ達親衛隊もメロメロになっている、てかアラバスタ王国側の人達もメロメロかよ

「良いに決まっておる」

おいコブラ何かつてにいつてんだよ！まあ勿論良いけど

「ああ、じゃあお邪魔するか」

そう言ううとビビは笑顔でゼロの手を握り廊下へと連れ出した

「ゼロさん、今回のたたかいは本当に助かりましたありがとうございます、皆ゼロさんに感謝していました私もこんなに心強い事はありませんでした」

ビビは軽く頬を赤く染めながら今なおゼロの手を握る

「いやいや、麦わらの一味が踏ん張ったからこそその戦果だ感謝するならルフィに感謝しなさい」

「は、はい！そうですね！」

ビビは笑いながら顔を覆う、そしてやつと気が付いた

「きやあああー！！！！すいませんゼロさん手をー」

ビビは手を離すと少し小走りで先に部屋へと入った

「どうしたビビちゃん！さては不届きものがビビちゃんの美貌に……！」

「どうも、不届き者です」

ゼロが続けて部屋に入るとサンジが目の前にいた、その奥にはいくつかのベットが置いてある

「あ、ゼロさん……」

直ぐに俺の後からキトラ、レーナ、カリーナ、カエン、シンが入ってくる、同時にサンジが反応した

「な、何だこの美女達はここは天国か！」

グルグル回りながら俺達の前へ出てくるサンジ、今回はカーリーナの手を持ち上げるとまた手の甲にキスしようとする

「あら？ダメだよサンジさん、私に手を出すと家の人怒るから」

「クウー!!!ゼロさん！あんたは最高だ！」

「お、おう、ありがとう」

サンジから感謝の言葉を頂くと俺はルフィの元へ歩く、ルフィも起き上がり俺の事を  
見ていた

「よおルフィ、大分ポロポロだな」

「オウ、いやあワニ強えーなあ」

「まあ一先ずお疲れさま」

俺とルフィは軽く挨拶を交わすとどんな所が大変だったかなどを話した、カーリーナはナミにどこかへ連れていかれたようだ

まあ積もる話もあるだろうレーナはサンジの事を鬱陶しそうにしている、カエンとシ  
ンはビビから部屋の端へ連れていかれた、ビビの顔が赤いのが分からないが何かあった  
のか？

キトラは俺の後ろで待機している

「所で前から思ってた事なんだけど…お前ら何者だ？」

突如ルフィから訪ねられた質問に俺は悩んだが答える事にした

「俺の名はゼロ・ガルドラ、獣神王国《ガルドラ》初代国王だ」

その瞬間、親衛隊とルフィを除いた全員が言葉を失った

「は、え？ゼロさんあんた…」

「王様なのか？すげーな」

サンジとチョッパーは興奮した様子でアワアワしている、ウソップに関してはひれ伏している

「そうか、だからあんたそんなに強い家臣を連れてるんだな」

ゾロはそう言うが俺は首を横に振った

「いや、こいつらは自分からこんな俺を好いて付いてきてくれるかけがえの無い仲間だ」  
俺がそう言うのと皆恥ずかしそうに下を向いたり上を向いたりしている

それから俺はどんな国か等様々な事について話した、暫くするとカリーナとナミが帰ってきた、カリーナの顔は何時にも増して何か吹っ切れたように明るかった

「さあ、夕食の用意が出来たよー」

扉が開いたと同時にさっき見たイガラムの風のおばさんが入って来た

俺達は後に続いて大食堂へ向かった

俺はビビの左隣に座りビビの右隣にシンが座った、俺の隣にはカリーナ、カエンシン

の隣にはキトラ、レーナが座りシンに世話を焼いている

それからは宴会が始まると俺はナミと飲み比べをしたりカエンはゾロと腕相撲をしている、チョツパーとシンも何やら薬の調合率について議論を交わしている

レーナ、キトラ、カーリーナはビビと話したりしている

「ドン！」

その時ビビ後方の窓側割れた、俺はビビを抱き寄せ飛来する何かを止めた

「何事だ！」

兵士の一人が割れた窓から外を見る、外は漆黒の闇が支配しており何も見えない

「大丈夫かビビ？」

俺は腕の中にいるビビに訪ねる、ビビは顔を赤くして頭から煙を出して気を失っている

「くせ者を捕らえよ！」

コブラの言葉にゼロは手をかざし制止させる

「大丈夫だ、もう終わってる」

そう言うとき食堂の扉が開いた

「捕まえたよ〜！」

そこにはいつのまにか消えていた親衛隊の姿があった

「どうやらB・Wの残党だな」

この時コブラ王とイガラム、チャカ、ペルが考えた事は同じだった

《《《《《同盟組んで良かったあゝゝ  
!!!!  
》》》》》

そんなこんなで夜はふけて行つた

## 帰国

「これで終わりだな」

コブラの質問に頷く事で返答するゼロ、そしてその横にはビビが立っていた

「結構長い滞在になったなゼロ」

「ああ、コブラには世話になったな」

麦わらの一味がこの国を去ってから今日で2ヶ月になる、俺とコブラは条約や細かな決まり事を決め互いに納得が行くまで話し合ってきた

そしてその結晶たる同盟条約書が今日やっと完成した、お陰で俺とコブラは互いに名前前で呼び合うような中になっていた

「じゃあ俺は部屋に戻る、ビビはどうする？」

「あ、はい、私も一緒に帰ります」

「ウウム、娘が男の部屋に入っていく…親としては複雑な気持ちだ」

コブラのぼやきを尻目に俺とビビは部屋へ向かった

「あの、ゼロさんあの話何ですけど…」

ビビは少し困ったような顔で問い掛けて来る



「ああ、ビビの好きなようにすると良い俺達は大丈夫だから」

俺が笑顔で答えるとビビも笑顔でハイ！と答えたそして扉を開けると目の前には何処かの王族と言つても差しつかえない程の美男美女がいた

「さあ皆、長く滞在したアラバスタ王国だが用事は済んだ、出航だ！」

それから一週間の日々が過ぎた、食糧や酒を積み込み用意が出来た見送りにわざわざアラバスタ王国の国民が多く来て港が埋め尽くされた

「ありがとう！救国の英雄よ！」

「永久に同盟を！アラバスタの親国《ガルドラ》」

「何かあつたら呼んでくれ兄弟国!!!」

「では、出航！」

「ちよつと待つてください!!!」

声の方を向くと手揚げ程のバックを持つビビとカルーがいた、ビビはコブラの前に伏すと

「獣神王国《ガルドラ》アラバスタ大使館の任お受けします」

そう、獣神王国にアラバスタ大使館を作ると言う事になつたさい代表にビビの名前が上がつた、ビビはこの国に残るか新しい冒険をするか悩み抜いた先に新しい冒険、獣神

王国を選んだ

「うむ、ネフェルタリ・ビビお前に獸神王国アラバスタ大使館館長の任を与える、見聞を広げてきなさい」

任命書を受けとるとビビは船へ乗り移った

「良かったのですか王よ、ビビ様を館長などと」

「良いのだ、ゼロと話して来て奴は何としても味方にしておかなければいけないと分かった、それに奴は信用できる…悔しいが娘を任せられるクウー!!!」

「泣くなら行かせなきゃ良いのに…」

…船上…

「ビビ、良いのか?」

「はい!これが私のやりたいことですから」

「ウシシ♪ビビちゃん歓迎するわ…ようこそ獸王丸へ」

キトラ、カリーナ、レーナ、カエン、シン、ラッスーそしてゼロ

新しく加わったビビと共に俺達は故郷獸神王国《ガルドラ》へ船を走らせた

一週間程走る中で俺はビビに獸神王国《ガルドラ》の地理と約束等を話した

大使館はもう一ヶ月も前から作っていたためもう出来ているらしい

そうしている間にも島が見えてきた：み、見えてきた？

「うわ、これがあの島か…」

そこには高くそびえ立つ黒い城壁に囲まれた島が見えた

「どれレーナ！城壁の強度試験としてお前のブレスをぶつけてやれ50%位で」

レーナはドラゴンに変身すると《雷龍の咆哮》を放つ、雷は光速で城壁にぶち当たる

「ドゴオオオオン!!!」

放電によるプラズマ等が散った後に残っていたのは

「ハハハ、固すぎね？」

傷一つついていない堅牢にして難攻不落の城塞だった

その時、城壁から何百もの光の柱が上がる

「王よおおお!!!」

そう言いながら飛んでくるのはこの島の一角《鳥王・バルドラ》

「おおバルドラ、変わり無いか？」

「ははあ、まあしいて変わったと言えばより高みへ上ったと言うぐらいですかな」

バルドラの冗談を聞きつつ船は港へ入る、港もドーム状になっており高波等が来たら封鎖しドーム内の船を守る、同時に海からの攻撃を防ぐ城壁にもなる

俺が島を出る前にセラトとベニートに頼んでおいた仕事だ、うん良い仕事だな

俺達が入ると試しに入港口を閉じてもらったゴゴゴと音を立てたから黒い厚さ三メートルは有ろうかと言う壁が海の中から高さ60メートルはあるドーム最上部に接合される

「これは王よ、いかがですかかな私とセラト殿の力の結晶は」

船が接岸するとセラトとベニートが向かってくる

「うん、良い仕事をしてくれたなありがとう」

「その言葉だけで報われます」

セラトは軽く涙を流している、大変だったんだな

「さあ王よ皆が待っています」

バルドラの言葉に俺は領き港の奥にある入国門を押し開ける、門は重く普通の人間には到底開けることも叶わないだろう、しかしこの門は通常開けつばなしにしておりこの入国審査官に許可を得たもののみ入国を許されるというものだ

閉めるのは何か敵が攻めてきたとかの時のみにする予定

俺達が扉を潜った瞬間目にしたものは城壁内に作られた城塞都市《バレル》、そしてその城塞内の、家々を埋め尽くす大勢の市民だった

「お帰りなさいませ我らが王よ!!!」

「お待ちしてましたぞ!」

…ん？見たこと無い種族が居るような：

「ああ、王よ紹介します降りてこい！」

「ザッ！という音を立ててオレの前にひれ伏す男と女達

「紹介します、獅子王族・族長・ライラ、狼王族・族長・シユラ、狐王族・族長・アイル、熊王族・族長・ギル、鹿王族・族長・ティーノ、蛇王族・族長・クラノ、猪王族・族長・ゴルナ、兎王族・族長・モール以上8種族が新たにこの国に住みたいと来ましてごさいます」

虎王族・族長・ゼロ・ガルドラ 総勢1800名 戦士1000名

鳥王族・族長・バルドラ 総勢2000名 戦士1200名

猿王族・族長・セラト 総勢2400名 戦士1500名

鼠王族・族長・ベニート 総勢5700名 戦士3300名

獅子王族・族長・ライラ 総勢2400名 戦士1600名

狼王族・族長・シユラ 総勢3300名 戦士1700名

狐王族・族長・アイル 総勢3320名 戦士1500名

熊王族・族長・ギル 総勢1500名 戦士1500名

鹿王族・族長・ティーノ 総勢3680名 戦士2000名

蛇王族・族長・クラノ 総勢2700名 戦士1800名

猪王族・族長・ゴルナ

総勢 4020名 戦士 3300名

兎王族・族長・モール

総勢 8700名 戦士 5800名

全人口 39720名

戦士総勢 25200名

何と政府から出された2万人と言う課題をクリアした、バルドラ達もこの島から去っていった過去の同士達を呼び戻しこの人数まで回復したようだ

「のおのお国王さん、わっしらあ戦うことしか能がない馬鹿ばっかじゃ、こんなワシ等でもあんたの国のために力になれるんか？」

そうやってきたのは獅子王族のライラだ、俺はライラの顔を真っ直ぐ見つめた、左目は縦に切り裂かれ開いていない、その他にも顔には沢山の切り傷、見せられた体には銃弾の傷もあった

「美しいなあ」

「何を言ってるっしやるんで？」

「その傷は仲間達を守るため身代わりとなつて付いた傷だ、そんなことが出来る奴が俺の国の力になれるのかだと？なれるに決まってるじゃねえか、お前達は全員俺の国の国民だ、そこに力にならない奴なんていねえ!!」

俺の言葉に静まり返る

「…はあく、バルドラさんあんたの言う通りだわ何てデカイ人なんだ…分かった！獅子王族・族长・ライラの名に宣言する、我ら獅子王族は獣神王国国王、ゼロ・ガルドラ様に一命をとって忠誠を誓う!!!」

同時に次々と種族が私達もと全員忠誠を誓った

「さて、じゃあ役割を決めようか」

俺達は一度王都《ガルドラ》に帰ると各部隊の編成を決めた

・ 地上戦闘部隊…虎王族・獅子王族

大将・虎王族・ジル

・ 上空戦闘部隊…鳥王族

大将・鳥王・バルドラ

・ 特殊偵察部隊…猿王族・狼王族・狐王族

・ 大将・セラト

・ 工作戦術部隊…鼠王族・兎王族・蛇王族

・ 大将・ベニート

・ 切り込み部隊…熊王族・鹿王族・猪王族

・ 大将・ギル

・ 親衛隊…人族・カリーナ、虎王族・キトラ、猿王族・カエン、鳥王族・レーナ、鼠

王族・シン、獅子王族・アモン、狼王族・ガウ、熊王族・ドン、鹿王族・スノー  
隊長・カリーナ

総督：獣神王国国王：ゼロ・ガルドラ

ロゼーノ王国守護隊

・鹿王族

アラバスタ王国守護隊

・鳥王族

城塞港町《クロニー》：狐王族・猪王族・蛇王族

・代表・アイル

・副代表・クラノ・ゴルナ

城塞都市《バレル》：鹿王族・兔王族

・代表・ティーノ

・副代表・モール

千年城《フラン》：虎王族

・代表・ジル

桃源城《パラディ》：鼠王族

・代表・ベニート



薬師城《ホーリー》…猿王族

・代表・セラト

天空城《メドラー》…鳥王族

・代表・バルドラ

獣王城《ガルドラ》…十二王族

・皇帝・ゼロ・ガルドラ

そして獣神王国の軍備拡張と道の整備のために一時的に俺の魔術・錬金術をシンに伝承する

シンは工作戦術部隊の一部をベニートから預けられこの国をより強固により強くするために走り回って貰うことにする、より大きな目的を遂げるために…

新しく入ってきた種族のレベルを確認したがやはり化け物といって良い部類だろう、生まれたての兎王族でもレベル47、ルフイに近い力を持っている

他の成獣の平均レベル180、であった頃のキトラよりも断然強い、今は各種族に俺が課したトレーニングと毎週行われる各種族での交流試合で四王族の平均レベルは220と他の種族よりは高いが直ぐに追い付いてくるだろう

「これは恐ろしい仲間だな」

ゼロ・ガルドラ 16歳 鬼虎族 魔術師・族長

レベル 720

HP 1467000 / 1467000

MP 1845000 / 1845000 (+1000)

筋力 1802000

耐久 1750000

俊敏 1177000

魔力 2200000

## 装備武器

・ 鬼魔銃《銃》

・ 刃鬼《特大剣》

・ 漆鬼《大太刀》

## スキル

・ 経験値5倍

・ 空間魔力吸収 レベルS

・ 属性無効化 レベルS

・ 魔力消費特大減少 レベルS

・ 魔力容量特大増加 レベルS

- ・魔力光速吸収 レベルS
- ・威圧 レベルS
- ・集団戦術 レベルS
- ・超再生 レベルS
- ・擬態 レベルS
- ・限界突破 レベルS
- ・暗視 レベルS
- ・剣術 レベルS
- ・銃術 レベルS
- ・格闘術 レベルS
- 固有スキル
- ・言語理解
- ・アイテムボックス レベルS
- ・サイレント レベルS
- ・鑑定眼 レベルS
- ・百発百中 レベルS
- ・伝承 レベルS

- ・魔術《雷》レベルS
  - ・魔術《光》レベルS
  - ・魔術《炎》レベルS
  - ・魔術《錬金術》レベルS
  - ・魔術《回復術》レベルS
  - ・魔術《結合》レベルS
  - ・魔術《纏い》レベルS
  - ・断罪の剣 レベルS
  - ・変身 レベルS
- 称号
- ・転生者
  - ・魔道を極めし者
  - ・虎王族の長
  - ・剣神
  - ・銃神
  - ・武神
  - ・忠誠心

・魔虎王

・獣神

・国王

・カリスマ

俺がスキルを見ていると突然港の鐘が鳴り響く、これは船が入国を求めているとの事だ

俺は王城の窓から飛び下りると城壁を全力で蹴る、凄まじいスピードで瞬く間に《バレル》に着いた

「何事だ」

俺が近くの獅子王族に尋ねると何やら何処かの国の船が入国を求めているとの事だった

「どこの国かは分からんのか」

「ハッ！今だ分からずにいます」

「分かった、俺が行くか？」

「いやいや、それはワシに任せてくだあせえ」

そう言いながら俺の後ろに立つのは獅子王アモン、熊王ドンだった

「要は何しに来たのかを聞いてもしも害を与えに来たならバラバラにすればええんで

しよ」

「ガアツハツハツハ、ワイにも残して下さいアモン殿」

俺は二人に頷くと二人は即座に変身60メートルのドームに飛び乗り外下の船を睨み付ける

獅子王アモンは深紅のたてがみに体からは赤い炎が立ち上る、その爪は溶岩のように赤黒く何をも切り裂く凶悪な武器、その巨体約7メートル

熊王ドン、体か、バチバチと青白い雷を放電しているこの巨獣、頭には湾曲した蒼い双角が二つ体の腹の辺りだけ毛が黒の三日月型をしており金の瞳は敵をにらみ殺す勢いだその巨体約8メートル

「ワシは獣神王国親衛隊所属・獅子王アモン、何をしに來たか返せい！」

「同じく獣神王国親衛隊所属・熊王・ドン、返答次第では容赦はせんぞ！」

ああーあいきなりケンカ腰かよ、まあ舐められるよりは良いだろう

すると船から一人の老婆が出てきた

「何だつて！若さの秘訣かい?!」

《《いや！聞いてねえよ!!》》

「私の名はD r. くれは、今回はこの国に用があつて來た」

「何用か！」

「そいつは教えらんないねえ、あんた等の一番トップを出しな、話はそれからだ」

「話にならん出直せ!!!」

「良いんだね？あんた等の為になると思ってたんだがねえ」

くればの怪しげな眼差しを受けるも獅子王と熊王は怯まない

「我らが王を守るため我らは存在する、少しでも怪しいものを王にあわせることは出来ん！」

「そうかいそうかい、じゃあ出てくるまで待つとしようかね」

そう言うときればは船室へ戻って行った、俺もドームの上へ飛び乗り船を見る、あんな装備でこの国を滅ぼせるとは思えん、じゃあ何を？

「すみません王よ、ワシらの交渉不足で」

「いやいや、お前達の気持ちは伝わった嬉しく思うよ」

そう言う俺は新しく親衛隊に加わった鹿王スノーを呼ぶ、スノーは一瞬で俺の側に寄り添う

「スノー、あの船へ行くぞ」

そう言うスノーは変身した、体長約6メートルまず目を見張るのはその大きく伸びた角、長さは約一メートルはあるだろう、鈍い光を放ち蹄からは魔術・闇の力が溢れだ

している、尻尾は漆黒に染まり刺々しい

俺が背に飛び乗るとスノーは首を上げドームを一蹴船へ降り立った

「さあ、こここの代表者は誰だ？」



## 交渉その2

「お前何者だ！どこから来た!？」

「お前達が俺達の王を呼んだんだろ?」

スノーが人形に戻る、身長163センチ蒼いショートヘアに少しつり上がった蒼い瞳、漆黒のローブに身を包みその新雪のように透き通った美しい肌と大人びた顔立ちの中にうつすら残る幼さからは怪しい色気が漂う

突然現れた絶世の美少女と青年に少しあわただしくなる甲板、すると船室からコツコツとヒールの音が聞こえた

「何だ！騒がしいね!!」

出てきたのは先程の老婆確か《Dr. くれは》と言ったか?

「Dr. くれは！侵入者です!」

「侵入者だあー?」

くれははサングラスを上にずらし俺とドームの上に集結している獣王達を見る、あいつら何してんだ?ドームの上には完全に変身した十二王達がこちらを睨んでいる、いやいや恐すぎかよ…

「ああー、そうかいあんだねこの国の王は」

そう言つてゆつくりと近付いてくる

「そこまでだ、何が目的かも分からん奴等を王には近づけさせることは出来ない！」

スノーはその氷のような瞳を吊り上げくればを威嚇する

「そうかい、じゃあここまでで十分さね…ドルトンちよつと来な!!」

くればが船室へ向かつて叫ぶと中からスコップのような物を背負つた大男が現れた

「呼びましたかDr. くれば」

「ほら！この人達を相手するのはあたしじゃ無いだろ！」

「まさか…あなた方が!!」

ドルトンは凄いい速度で駆け寄ってくる、しかしまたしてもスノーに止められる

「お前達は誰だ？返答次第では覚悟して貰うぞ」

「これは申し訳ない、確かにいきなり貴国に押し掛けてるのに紹介もまだでしたね…

サクラ王国国王ドルトンです、本日は新国になったため隣国に挨拶に回っている所

です。貴方の名前を伺つても？」

「ああ、俺はこの国の国王ゼロ・ガルドラだ」

隣国？確か隣国の名はドラム王国だった筈だが…

「隣国はドラム王国だった筈だが？何かあつたのか？」

俺が尋ねるとドルトンは少し苦笑いしながら一言

「ドラムは潰されたのです、一つ海賊団と一人の名医に、そして再興した…まあ暗い話は終わりにして！やはりあなたがこのロゼーノ王国の国王ですね！」

…ん？何かおかしい気がする

「いやあー、今まで一度も外交がありませんでしたので連絡手段も無く急に押し掛ける形になってしまい申し訳ないです」

「いや、だからその…」

「あの申し訳ないが港に入港させて頂いても宜しいか？あなたの国を見てどんな隣国なのかを深く知りたい！これからの我々の為に!!」

ああ、ダメだこいつ話を通じねえ…

「分かった、入港を認めるゲートを開けろ！」

俺はドームに向かって叫ぶ、同時に轟音を上げながらその大口をあける城塞港町《クロニー》その迫力に思わず言葉を失うドルトンの船の乗組員

「何て事だ…」

「さあ行くぞ」

「そう言えばここに来る途中によく分かんない島を見つけたよそれも一つの島国のような大きさだった…丁度ロゼーノとサクラ王国の中間地点辺りだったと思うけど？」

…シンのやつももう少し良いところは無かったのか？

「そうか…今度うちの方でも調査隊を派遣させるよ」

「ああ、でもあの港の入り口にはあんたんとこのあの港に似たような物もあつただけどねえ本当に知らないのかい？」

くればが怪しく笑うと俺も軽く笑い返し何も答ええない、多分バレたか…この婆さん油断できねえな

「後良い忘れたが今から行くのはロゼーノ王国じゃない」

俺は港に船を停めさせる、そして周りを見るように促す

「どういう事だ？」

ドルトンの顔が曇る

「ここは獣神王国、獣人達の住む王国だ」

港町《クロニー》に住む人々を見るサクラ王国一行、その目に映るのは巨大な獣が闊歩する石畳、そしてところ狭しと乱立する家々、その中には各家庭の日常が流れている

「これが…獣人の王国」

「ここはロゼーノ王国の筈だろ…何だいこの国の科学力はそれに種族も桁違いだよ」

啞然とする乗組員達を尻目に俺はバレルへと続く大門を開け話はバレルの執務室で行うことにした

「ようこそいらつしやいました王よ、執務室は開けておりますのでごゆっくりとお使い下さいませ」

バレル代表の鹿王族・ティーノから迎えられる、巫女の服装をしたティーノを見てサクラ王国の連中は鼻の下を最大限に伸ばしている、それもその筈引き締まった肉体に茶色の髪、瞳も茶に染まり角に添えられている二個の鈴、歩く度にシャンシャンと鳴りその歩き方さえも美しい舞を見ている気持ちにさせられる

「なんとお美しい、ゼロ殿こちらの方は？」

「ああ、この人はここ《バレル砦》の代表をしているティーノだ、ここバレル砦は戦闘構成員が殆んど女性だ、逆に男が女のために家事などを行う種族なんだ」

「お初にお目に掛かります、私はここバレル砦の代表の任を任せて頂いている鹿王族・族長ティーノと申します、以後お見知りおきを」

「おお、これはこれはご丁寧にサクラ王国のドルトンだ」

ティーノは軽く頭を下げた、俺たちは早速応接室へ向かう事にした、途中セリアに連絡を入れたこいつらの目的はロゼーノ王国だと言うからな、ティーノに足が早い奴を迎えに出した

「さあ話を聞こうか？」

俺がドカリとソファに腰かけテーブルに腕を組む、次いでティーノは俺の後ろへ回り

身の回りに不備が無いかを確認している、そのまだ20代にしか見えないプロポーシヨ  
ンで後ろに立たれるととても緊張する

「では、今回突然の訪問の理由をお答えします私たちはこの度ドラム王国の独裁政治か  
ら解放され新しくサクラ王国と言う国民を第一に考える王国へと変わりました」

ドルトンは熱く語り始めた

「しかし、私達の王国は軍事力そして生活レベルも高くない、その為周りの隣国に助けを  
求めたいと考えました。

探していくなかで今まで外交が無かったここロゼーノ王国ならば私達とゼロから関  
係を築けるのではないかと思いきこへ産業並びに軍事同盟を結んで頂きたく参りまし  
た」

「そうか、まあセリアが来るまで飯でも食べて待とう」

俺がティーノに目配せする、ティーノは領き外へ出た俺は何故この王国を作ったのか  
等を熱く語り合っていた一時間程たった頃ティーノは親衛隊と共に料理を運んできた  
「素晴らしい!!!共存のための国家そして自分達の長所を生かした国家の成立感動しまし  
た!」

熱く俺の手を握るドルトン、俺はその手を握り返し親衛隊に机へ料理を運んでもらっ

た

その中に何故かセリアがいた

「いや、セリア何してるんだ？」

「だって将来は私がゼロ様に料理を作るかも知れないし…な、何でも無いです!!!」

セリアは顔を赤くしながら俺の隣へちよこんと座った

「おお、この方がロゼーノ王国の国王にして皇女様ですね」

するとセリアはハツと立ち上がると恭しくスカートの裾を持ち上げ美しいお辞儀をした

「私がロゼーノ王国国王セリア・ロゼーノです、こちらのゼロ王とは幼い頃からの付き合いです」

「そうでしたか、たった今ゼロ殿の建国に大いに共感させていただいた所です」

「そうでしたか…で、この度の訪問の理由は同盟だと伺いましたが間違いないですか？」

「ええ、我々はロゼーノ王国、そして新たに獣神王国との同盟を結びたいと思っております」

セリアは少し顔を曇らせた

「サクラ王国、あなた方も新しく建国なさると言う事ですか…と言うことはやはり3つの条件を飲まなければいけないのですかね？」

「はあ、お見通しでしたか……ですが我々が出された条件は二つだけでした、国民を二万人以上と王の選定だけなのでもう条件は整っています」

それから俺達はサクラ王国は軍隊が無いことや建築技術が疎く安全な家を作りたいたいことなどを聞いた

「よし、獣神王国からの同盟条件は二つだ

一つ、建国の推薦を出すこと

二つ、そちらの医療技術の指導

これを守ってくれるのなら我々獣神王国はサクラ王国を同盟国として全力で国防に手を貸そう」

「おお是非ともー」

こうして我々はサクラ王国との同盟をむすんだ、これにより建国までのカウントダウンが始まった